



EMOTION !

かのん

この世は別に、聖人君子が闊歩するような清く正しい世界ではない。

どこにでも犯罪者は存在するし、欲望を満たす為に他人を蹴落とすような輩は五万といる。だから、そういう存在を否定することは出来ない。

出来ないが、そういった存在に対して、「あり得ない」「認められない」「不愉快だ」と思うのは常識の範囲だろう。「潰してやろう」と思う人間だって居るかもしれない。

だから、自分の婚約者を、「その方が愉しそうだから」という理由で封印されて、そいつを「絶対に屠ってやる」と怒りを露わにするシャーロックを咎めることはできない。

封印。

そう、殺されたわけではなく、封印を施した人間が死なない限り、半永久的に目覚めないという呪いを、哀れシャーロックの婚約者、ジュリエッタは愉快犯的な魔女に掛けられてしまったのだ。

魔女。

それは、この世界に存在する唯一人の魔力継承者の事で、奇跡を起こす力を「借りて」いる法術師とは一線を画する。

法術師。

彼ら、修行を積んだ人間は、世のバランスをつかさどる精霊から力を借りることが出来る。借りる方法は様々だが、法則が一つある。

精霊は「綺麗なもの」を好む。彼らが何をもって「綺麗」と判断するのは、現在の研究では判っていない。判っていないが、法術師はその修行の最中に、彼らの好む「もの」を見つけて、それを契約の対価として力を借りる。

その力によって、普通の人間では出来ない事をやってのける。

ただし、それは人の為になる様な力しか発揮できない。

たとえば、壊れたものを元に戻したり、傷ついた肉体を癒したり、病気を回復傾向に持って行ったり。人のプラスになるような力を発揮する。

それが法術師の理であり、絶対の条件だった。

だが、魔女は違う。

そういう治療の奇跡を行える半面、その力を「己の欲望の為」に使用することが可能なのだ。

法術師は他人を傷つけることが出来ない。それをやると、必ず己に跳ね返ってくる。精霊が「契約違反」とみなし、何らかのペナルティを与えてくる。例外はない。だが、魔女は違う。人を呪い殺したり、己の欲望の為他人をまどわせたり、排除したり、人の為にならない奇跡を引き起こすことが出来る。

なぜならば、魔女とは単独で奇跡を行えるものだからだ。

ともすれば、人の頂点にたっているような気にさえなる、強大な力。その力を、魔女は代々相応しい人間に受け継いでいく。故に、人間的に深みがあり、慈悲深く、無欲で威厳のある者が選ばれていった。

だが、現在魔女に選ばれた輩はトンデモナイ人間だったのだ。

「シャーロックっ」

ぶら下がり懸垂の要領で身体を持ち上げろ。お前なら出来る。いいから、とつとつ上にあがれ。

ハティ・フローズニルは限界だった。体力的にも、精神的にも。

彼女が現在ぶら下がっているのは、塀からはみ出している樹の枝だった。とある屋敷の外周を護るそれを乗り越えて、中に侵入しようとして、結果、ぶら下がっている。ぶら下がり懸垂の要領で、なんて、塀の下からハティを見上げている男がいつも簡単に言うが、女の……しかも17の少女の細腕では明らかに無理だった。

「シャーロックっ！！」

ばたばたと足を動かし、限界を訴えて視線を下げる。夕焼け色をした少女の髪。きっちりと切りそろえられた前髪の下から、淡いグリーンの瞳が「救出」を懇願するが、受け止める碧眼はどこまでも冷淡だった。

「お前が上がらないと、俺様が上がれないだろうが」

やればできる娘だろ？お前は

真顔で言われて、ハティのこめかみに青筋が浮かび上がる。腕は限界を訴えて、ふるふると震えているし、心なしか、掴んでいる樹の枝が撓っているきがする。なんだか「めきめき」いう音も聞こえてくるし……。

「シャーロックっっ！！もう無理！絶対無理！！落ちるっ！！！」

とうとうハティの喉から悲鳴が漏れた。一刻の猶予もないと、全身で訴える。だが、世の中の負の感情を集めて凝りかためたような「漆黑」の髪に、深くて底の見えない「碧眼」の男は、やれやれとでも言いたげに、大げさに肩をすくめて「だらしのないやつ」と吐き捨てた。

がっかりされてもね。無理なものは無理なのよ。

イラっとするが、ハティは心の中で「大人になれ大人になれ大人になれ」と呪文のように繰り返して、もう一度、その男に視線を落とした。

腕を組んで自分を見上げるその男は、美丈夫といっても良いほどの容姿である。癖っ毛なのか、風に揺れて整わない黒髪と、長めの前髪の下から見える瞳は涼やかで、人を見上げているにもかかわらず、見下している威圧感が有る。尊大で偉そうで自己中心的で我儘。

外見は温和で、笑うと周りの空気が明るくなる天真爛漫な様相だが、ハティはそれが彼の被っている羊だと知っている。

この短い期間で嫌と言うほど思い知らされた。

紳士然とした立ち居振る舞いに、世の女性たちはころっと彼の虜になる。だが、実態は嫁入り前の娘を樹の枝にぶら下गरせて、「懸垂の要領でとつとつ上にあがれ」と命令するような男なのだ。

「シャーロック・クロロードさま。わたくしのように卑小な存在にはこのような尊く偉大なる任務を遂行するだけの力がございません。非力なわたくしをどうかお助け願えませんでしょうか？」

心を落ち着かせて、ハティは懇願した。シャーロックを睨みつけるグリーンの瞳に、過分に怒りの炎が滲んでいるのが、大人になり切れていない証拠だが、この際どうでも良い。

とにかく降りたい。

それに、現時刻は真昼間なのだ。

さんさんと輝く太陽と、抜けるような青空。優雅に漂う羊雲。爽やかに吹き抜けていく風が、木立ちの葉とぶら下がるハティを揺らして通り抜けていく。

絵にならない光景だ。むしろ、通報される。

昼下がりと言う事で、極端に人通りが少ないが、いつ誰の目に留まるともしれない。

降りたい降りたい降ろせよコノヤロウ、とだんだん苛々絶頂で訴え始めるハティに、シャーロックはほう、と溜息をもらした。

「仕方がない。正攻法は諦めるか」

これのどこが正攻法！？と突っ込みたいのを我慢して、そうと決まれば下ろしてくれ、と小刻みに震える腕で耐えながら、ハティは男を見た。

が。

「とっとと降りて来い」

「お……降りて来いって、あ、あんたね……人を抱えあげて樹にぶら下げたんだから、同じ要領で下ろしてよっ！」

「そんなに高さはない。そのまま手を離せば事足りるだろう」

「足りないわよ！？怪我したらどうするのよ！？」

「お前、一応法術師なんだろう？怪我くらいで一々騒ぐな」

「騒ぐわよっ！」

半分涙目になって突っ込むが、シャーロックはおもむろに彼女に背を向けてさっさと歩きだす。

「さて……正攻法が駄目なら、やはり裏ルートかな……」

「ち、ちょっと！？」

このまま置いて行くつもりだろうか。冗談じゃない。シャーロックがいるからなんとか（？）怪しい人認定でも我慢していたのだ。だが、一人取り残されて通報されたら目も当てられない。

「こ、こらっ！お、おいてくなっ！！」

再び足をばたつかせて、ハティははっと気付いた。今、明らかに、彼女の掴まる樹の枝が「みしり」と嫌な音を立てた。

「え？」

青ざめて、枝の付け根を見れば。日の光りを受けた生木が白くが輝くのが見えて。

ばきばきばき、という鈍い音を立てて枝が裂け、声にならない悲鳴を上げたハティは勢いよく石畳の上に落っこちた。

「正攻法が駄目なら、はやり、危険を顧みず奇襲をするべきか」

痛い、と絶叫する少女の声を完全に無視した男が、ふむ、と腕を組んで塀沿いに歩いて行く。目当てのものは、この屋敷の中に有る。だから、なんとしてもこの屋敷に侵入したいのだが、きっかけが無かった。

例えば。

この屋敷に所縁のあるものと知り合いだとか。この屋敷に出入りしたことがあるとか。近所に住んでいるとか。

そういった繋がりががないために、結局は「押し入る」か「訪問する」という手段しか取れなくなってくる。

シャーロックは極力「訪問」は避けたいと思っていた。この屋敷の人間と正面切って会うのは非常に億劫な上に面倒くさい。色々手順を踏まなくてはならないだろうし、それなりに素性を明かす必要も出てくる。

これだけの大きな屋敷を維持している人間だ。怪しい人間など門前払いされるのが落ちだろう。

だから、彼としては「正攻法」の「押し入る」を実行したかったのだが。

「お前が予想以上にどんくさいから、みろ……俺様の計画が台無しだ」

溜息交じりに告げて、シャーロックは後ろを振り返った。

十数メートル離れた先で、お尻を抑えて座りこんでいる連れの法術師が見えた。しばし黙考したのち、シャーロックは再び歩き始めた。使えない人間に構っている時間はないのだ。

「あの野郎……」

対してハティは、さっさととっとと先に進んでいく連れの男に怒りが頂点に来ていた。今までだって散々バカにされたり見下されたりしてきたが、彼を助けられるのは自分だけだからと、上手くやってきたつもりだ。

だが、ここまで馬鹿にされ、協力を拒まれるとみじめを通り越して怒りしか湧いてこない。

そう、ハティは彼に協力するために……もっと言えば、「協力してやってくれ」と頼まれたから、ここに居るのだ。

好き好んでシャーロックの傍に居るわけでもなければ、命令されているわけでもない。

(あたしはアンタの召使じゃねえんだよ、馬鹿野郎！)

痛む尻を抑えて、ハティは涙目で遠ざかる背中に心の中で叫んだ。

気配を感じた。

「おや」

その男は顔を上げると、やれやれというように肩をすくめる。

「どうかしたのか？」

傍に座っていた少女が顔を上げる。スマイレ色の瞳をした男は、鳶色の瞳をくるんと丸くする少女に「いや」と苦笑って答えた。

「どうやら来客のようだね」

「来客？」

それはまた、珍しいこともあるものだ。

目を瞬く少女に微笑み返し、青年は立ち上がった。そのままゆったりとした足取りで部屋を出る。と、重厚な、黒光りするドアの向こうに、切れ長で、鋭い眼差しのメイドが一人立っていた。肩口で切りそろえられたストレートの黒髪を軽く揺らし、そのメイドはじっと青年を見詰めた後、目礼する。

一瞬だけ滲んだ殺気に、青年はおかしそうに笑った。

「客人がいらっしゃるようなので、私は出迎えてくる」

にこにこ笑ってそう言えば、メイドは冷たい一瞥をくれ、そのまま礼をすると、先ほど青年が出てきた部屋のドアを開けて中に入って行った。ぴりぴりとした殺気のようなものをその背中から感じ、ますます愉快そうに青年は笑った。

「そんなに警戒しなくてもいいのに」

軽い口調でそう言って、青年は踵を返すと踏み心地の良い、赤い絨毯を踏みしめてゆっくりと屋敷の裏口に向かって行った。

「……………」

痛む尻のまま、のろのろと立ち上がったハティはすでに屋敷の角を曲がって姿の見えないシャーロックにこめかみに青筋を立てた。

待ちもしなければ、いたわりの言葉すら掛けてくれない。なんという扱いだ。

(あの野郎……)

とてもじゃないが、口に出して言えないような悪口を胸中で繰り返し、ハティははう、と溜息を零すと改めて屋敷の堀を見上げた。

夏の空の向こうにひっそりとそびえる屋敷は、両翼の壁に蔦が絡まる、どっしりとした石造りだった。城、といってもいいような重厚な雰囲気を持つその屋敷に、シャーロックは正攻法を諦めて、裏ルートで潜入すると漏らしていた。

「正面玄関か……」

一見ただけでその大きさと敷地の広さが判るこの屋敷はしかし、噂通り人の気配が極端に少

ない。

枝にぶら下がり、不法侵入をしようとしていたハティを見咎める通行人も、実のところいなかった。

街の中央から外れたこの屋敷には、少女とメイドが住んでいるだけだ、という話を聞いたのは、ハティとシャーロックが滞在している宿屋の主人からだった。

街々を転々として色々な噂を仕入れて、そこに直で当たってみる。

それが、ハティとシャーロックの旅のざっくりとした目的だ。それだけだと、本当にアホみたいな旅だが、一応、「魔女の気配」を察知して、その香りが微かに残る街を選んで滞在し、捜査をしている。

世界で唯一の魔力継承者。

(……………)

尊大で、自己中で我儘。

シャーロックと同等の評価を得るその人物こそが、魔女ロツテロッドだ。

彼女の姿を思い出し、唯一の魔女の気配を「感知」出来るハティは溜息を吐いた。

確かにここから彼女の香りを感じることが出来る。だが、それだけで、ここに居るのか居ないのか、何時居たのかが判らない。

神経を集中しようとして、ハティはその碧の瞳を閉じて外界の情報を遮断する。そうすることで、他の感覚が鋭敏になり、視覚という、一番絶対のものでは「捉えきれない」ものを捕えようとするのだ。

深呼吸を繰り返し、感覚を解放しようとしたその時。

「あ」

唐突に声を掛けられて、ハティはぎょっとして後ろを振り返った。

「やっぱり」

「へ？」

どこから現れたのか判らない青年が一人、こちらをみてにこにこ笑っていた。

金髪に柔らかなスマイル色の瞳。ベストに、腕までまくりあげたシャツの白。振りまかれる笑顔。その全てが夏の太陽の下であり得ないくらいきらきらと輝いていた。

自分の連れとは大違いの、爽やかさ。

眩しいものでも見た、と目を細めるハティに、その男は徐々に近づくと、落っこちていた木の枝を拾い上げた。

「大丈夫だった？」

「え？」

唐突に言われ、ハティは、持ち上げた木の枝を振って見せる青年に瞬きをする。

「これ」

折れた木の枝。それを眼前に付きつけられて、ハティははっと我に返った。

まさか。

まさかまさかまさか。

(見られていた!?)

不法侵入をしようとしていた所を見られていて、それで、落っこちたのも見られていて、そして、大丈夫かと聞いているのだろうか、このお兄さんはっ!

どっと背中に嫌な汗を掻き、ハティはちんたらしていた己を激しく呪った。というか、元と言えば、ハティを置き去りにしてとっとと居なくなったシャーロックに問題がある。

「あ、ああああ、あの……えっと……で、ですから、私はえーっと」

決して怪しいものじゃなくて、あのあのあの……

あわあわと語を繋ごうとするハティをしばらく見詰めた後、きょとんとしていた青年が、「大丈夫?」と彼女の額に手を押しあてた。

「!？」

「あ、熱中症ってわけではなさそうだね」

じゃあ、やっぱりこの枝の所為かな?

にっこり笑う青年に、ハティは青ざめた。

「す、すいませ」

「なにより怪我がなくてよかったよ」

「わ、悪気はなかったんです」

「直撃を喰らったわけじゃなさそうだしね」

「ただ、あの……私の連れが尊大な悪魔みたいなやつで」

「ま、折れた枝に頭ぶつかる可能性なんて、こーんな人通りのない通りではないけどね」

かみ合わない会話を繰り返していたハティは、飛び出した青年の台詞に、「へ?」と目を丸くした。どうでもいいがさっきから間抜けな返答しかしていない。

「だから、頭、ぶつけなかった?落ちてきた枝に」

にっこりと、悪意のない笑みを向けられて、ハティは完全に毒気を抜かれ、「はあ」と溜息のような返事をしていた。

「そう。それはなにより」

青年は啞然と佇む彼女の手首を掴むと強引に引っ張った。

「でも、この木の管理が出来ていなかったのは申し訳なかった。レディに怪我をさせるところだったしね。だから、お詫びくらいさせてくれてもいいだろう?」

「え!？」

「ね?」

有無を言わせない強さが、微かに滲んでいる。

何故だかわからないが、その男に掴まれた腕の毛が総毛立つような、ひやりとした不快な冷たさが、微弱ながら、ハティの肌を這う。

危険。

それでもハティはこれがチャンスかもしれない、と思ったのも事実だった。

(……悪い人に見えないし……)

感じた危険と不快感は、本当に一瞬で、もうハティの肌には残っていない。

掴まれているその掌からも、温かな体温を感じるだけだ。それに加えて、ハティは腹を立てても居たのだ。シャーロックは相変わらず、追いついてこないハティを心配して引き返しても来ない。そんな奴にひと泡吹かせるのは愉しそうだった。

(どうせ屋敷には入らなくちゃならないんだから、招待、ていうのを受けるのも悪くないわよね)

無理やり気持ちを切り替えて意気込み、ハティは「……お邪魔じゃないかしら？」ととてもとても殊勝な返事してみた。とたん、青年は「とんでもない」と大げさに驚いて見せ、続いて「お客さまなんて久しぶりだからね。妹もきっと喜ぶよ」とスマイレ色の瞳を柔らかくして答えてくれる。

これで、ハティはシャーロックよりも、一歩大きくリードすることが出来た。

(何事も飛び込んでみなくちゃわかんないわよね……)

正門とは逆の裏門から屋敷に招待されて、ハティは腹に力を込めた。絶対にシャーロックを啞然とさせてやるとばかりに。

シャーロックは郵便屋を探していた。

いたのだが、人間、緊急の欲望には勝てないものである。

郵便屋を早急探し出したいと願っているにも関わらず、彼は一人、街中のオープンカフェでコーヒ一片手にチキンサンドに齧りついていた。

あのまま屋敷を訪問するのはどうにも面倒そうだし、内部が良く判らない。メイドと少女が住んでいるという噂だが、彼らが外に出てくる姿を見たものがほとんどいない。

(奇襲を掛けるにも、相手が何者で、何を考えているのかさっぱりってのはリスクが大きすぎるしな)

指先に付いたソースを舐めて、頬杖を付いたまま考える。そういえば、連れの法術師はどうしたのだろうか。

「……………」

それを知るためにも、とにかく郵便屋だ。

郵便屋。

それは、ここレイリーフの国中を満たす「大気」の精霊と大地を駆け廻る「水源」の精霊と契約をし使役出来る、法術師集団が運営している商業サービスだ。

彼らは大気と水流を操り、人と人とを繋ぐ。遠く離れている者と会話が出来たり、物質を届けたりすることが出来る。

荷物や手紙、会話をしたいものは、近所を闊歩している郵便屋を捕まえて、頼めばいい。相場はその時々で変わるが、良心的だ。

その郵便屋の力を借りて、シャーロックはある人物と連絡を取りたいのである。だが、肝心の郵便屋が見つからない。

(郵便屋は確かに便利だが、難点が有るとすれば、絶対数が少ないってとこだよな……)

この辺りで見かけたよ、と通りすがりの人間から教えてもらったのだが、タッチの差でもう居ない。彼らにも一応持ち場があり、巡回ルートがあるのだが、逸れてしまえば出会えない。

かちん、とカップをソーサーに戻し、シャーロックは苛立たしげにテーブルを指先で叩く。このままでは長いとはいえ夏の日が沈んでしまう。

(ってか……ほんと、真面目にアイツはどうしたんだ?)

なんだかんだで、ハティはシャーロックに付いてくる。同行を頼んだ覚えはないし、むしろ自由に動けない分、居ても邪魔なだけなのだが、おせっかいな連中に「頼まれた」らしく、彼女は彼女なりの矜持でシャーロックの連れに収まっている。だが、シャーロックにしてみれば、使える部分は非常に少ない、というのが本音だ。

役に立つことと言えば、唯一の魔女の居場所の「見当」を付けることくらい。

洗面で溜息を付き、シャーロックはサラダのボウルにフォークを突きたてた。

夕焼け色の髪に、碧の瞳。

彼女の姉達とは似ても似つかない外見。

(放っておく……訳にもいかねえんだろうな、多分……)

ああ、なんて面倒なんだろう。

いらだたしげにサラダを頬張り、シャーロックは通りに視線を投げ続ける。とにかく今は郵便屋だ。

ドレッシングに手を伸ばし、もう一杯コーヒーを頼もうか、と考えていた彼は、不意に通りをスキップしながら歩いて行く存在に目を止めた。

つばの広い三角帽子。肩から斜めに下がった、妙に膨らんだ郵便バッグ。そしてなにより、精霊の気を引く「綺麗なもの」代表の金の鈴が、ちりんちりんと帽子のつばで揺れている。

「郵便屋一っ！！！」

がったん、と席を蹴って立ち上がり、シャーロックは怒鳴った。びくうっと肩を強張らせる存在が、つばを押し上げ、そしてつかつかと近寄る男を認めると、すっと一礼した。

屋敷内は、しんとして静かで、窓から差し込む、ぎらぎらと煩い夏の日の光りすら、磨かれて透明さを増すような、不思議な静寂に包まれていた。

ひんやりとした空気がハティの身体を包んでいる。ルートと名乗った青年は、この屋敷の主である齢15の少女の兄だと言う。

妹のエルザとは半分しか血が繋がっておらず、ルートの母親はこの屋敷の元メイドで、ルートを身ごもって暇を出され、田舎に帰らざるを得なかったらしい。

「僕が生まれる前の話だし、自分の父がこんな立派な屋敷と土地の持ち主だなんて知らなくて。エルザの事も、最近まで全然知らなかったんだよ」

妹であり、この館の主であるエルザの元にハティを案内しながら、ルートは苦々しく笑った。「それが良かったのか悪かったのか……傍にいてあげることが出来たら、彼女を一人にするようなことは絶対になかったんだけどね」

今、彼女は一人だ。

「……メイドさんと二人暮らしだと聞いていたんですけど」

廊下には塵一つ落ちていない。窓ガラスも曇りなく磨かれている。とてもじゃないが、使用人一人でここまで出来るとは思えない。少しだけ探りをいれるように尋ねたハティに、ルートは「彼女は優秀でね」となんだか可笑しそうに笑った。

「レディ・ディアナは屋敷を護っていた僕らの父親が亡くなって、屋敷だけが手元に残ったエルザが、多くの使用人を抱えるだけの財を持たないとなっても、辞めなかった女だよ」

使用人達は、主に仕えていたのだからと、つぎつぎと暇を告げて去って行った。

一人広大な屋敷に取り残されたエルザを、護り仕えて来たのはレディ・ディアナ唯一人。

エルザの血縁で有るルートが、父の訃報と妹の暮らしを知り、飛んで来るまで、彼女は一人もくもくと屋敷の手入れを続けていたらしい。

「彼女には本当に感謝している」

目を細め、ふわりと笑うルートに、ハティは少しだけ胸が暖くなるのを感じた。

ルートには妹を想う気持ちが有る。そして、その彼女を護り支えていた使用人のレディ・ディアナに対しての感謝の気持ちも。

それは久しくハティが触れていなかった、普通の気遣いだった。

(こんな小さな、当たり前のことに感動する日が来ようとは……)

ハティの連れの男は、「やってもらって当然」「やらせて当然」「自らやる必要が無くて当然」という付き合う人間の神経をすり減らさせたら一番の、傲慢さで出来ている。

彼に「一緒に旅をしてくれてありがとう」などと思われたことなど、一度たりとてないだろう。

(こういう人間と出来れば旅がしたかったっ)

どこか切実にハティは思う。

そして、シャーロックのような人間と一緒に居たいと願う女の根性を心底疑うのだ。

彼はモテる。

なんでかしらないが、モテるのだ。

(顔が良いのは認めるけど……他、最悪なのになんでだろ……)

実際、彼に弄ばれて泣いている女を、旅に出る前に、ハティは見ているし、知り合いも中にも実は居たりする。

彼の非道っぷりが身にしみているハティとしては、あんな奴の為に人生を棒に振らなくて良かったと、精霊王に感謝すべきだと力説したいのだが、泣き崩れる女たちはそうは考えられないらしい。

彼の一番じゃ無くなった事に対してのプライド。彼をかっさらった女に対しての復讐心。嫉妬心。

醜い感情と泣き喚く姿の友人知人を思い出して、ハティは彼の相手はよっぽど度量が広くなくては、務まらないだろう、という結論に達していた。

(……)

ハティは石造りの廊下に落ちる透明な日差しに、シャーロックの婚約者、ジュリエッタを重ね見た。

金色の日差しを集めたような、豪華な髪は、流れるようにゆったりと、その華奢な背中を覆い

夏の木立を思わせるような淡い碧の瞳は、知的に澄み。

ほっそりとたおやかな手を、桜色の頬にあてて微笑む様は、レイリーフの絵師がこぞって肖像画にしたくなるほどの美しさだった。

柔らかな、日だまりのような優しさと、溢れる知識。そして、寛容さ。

シャーロックの非道を受け止めるには十分すぎるほどの人間だ。

(やっぱり勿体ない……)

そこまで考えて、ハティはいつもの結論に達した。あんなに綺麗で可憐な乙女を手折る男が、あれではどうしようもない気がする。かといって、シャーロックにジュリエッタとは真逆の女性

が似合うかと言えば、それはそれで困る。

押し黙り、黙々と己の考えに没頭するハティに、ルートは視線をやるとちょっと目を瞬いた。「そんなに考え込まれて、何か悩み事でも？」

そっと聞かれて、「いえいえ」と慌ててハティは手を振った。

「徐々に、人間らしい思いやりに触れたもので、ちょっと感動していたんです」

「はあ……？」

首を傾げ、怪訝そうな顔をするルートに、曖昧に笑い、ハティは足を止めた。目の前に、重厚な黒塗りの扉が聳えている。

ごくく、と息をのむハティに気づき、ルートがそっとドアノブに手を掛けた。

「そんなに緊張しなくても……それに、中に居るのは僕の妹とレディ・ディアナだけですから」
「はあ」

がちゃん、と取っ手を押して、ゆっくりと扉を開く。微かに軋んだ音をたてて、徐々に隙間を広げるドアを前に、ルートが呟いた。

「お客様をお連れするのは、本当に……本当に久しぶりです」

さあ、どうぞ。

にっこりと笑う、ルートの背から、大量の日の光が注ぎこみ、館の薄暗さに慣れていたハティは、思わず目がくらんでたたらを踏んだ。

「兄者、こちらがお客人か？」

まだ甘さの残る、柔らかな響きの声。だが、それが紡ぐにはいささか固い口調。光にちかちかした目を瞬いて、ハティは背中を軽く押されて中に入った。

天井まで届く大きな窓が、等間隔に並ぶ大きな部屋。ビロードの張られた座り心地のよさそうなソファに、ゆったりと背を預けているのは、ハティと二つしか変わらない少女。その彼女のやや幼い鳶色の眼差しには、人を見下すような天性の気位の高さが見て取れた。

我儘。

そんな単語が、一瞬でハティの脳裏に浮かんだ。

「お前、名前は？」

金色の巻き毛をブルーのリボンで結び上げ、肩口に垂れた一房が、夏の日を浴びてきらきらと輝いている。真っ白なドレスの裾は長く、でも優雅にふわりと膨らみ、幼いデコルテは、ピンクの薄いレースで飾られている。手袋をはめていない手に持つ、扇で示されて、ハティは我に返った。

我儘な人形。

そんな単語を口にしようになって慌てて名乗る。

「ハティ・フローズニルと申します」

己が着ているコットン百パーセントの淡い黄緑のスカートの裾を摘んで会釈する。ふわり、と揺れた夕焼け色のハティの髪を、面白そうにエルザの眼差しが追った。

「お前の髪の色、血の色だな」

「エルザ」

ルートが窘めるように口をはさむ。ちら、と申し訳なさそうに彼の視線がハティに注がれるが、彼女は別に気にしていなかった。

それこそ、17年と言う人生の中で、腹を立てるを乗り越えて、「どうして人は考え方が違っているにも関わらず、同じような評価を万人が抱き、下し続けるのだろうか」と人間に思考に付いて真面目に考えるほど言われ慣れていた。だから、今も不思議でならないという表情で、「皆そう言います」とあっさり答えていた。

「……………」

ちょっとしたイヂワルのつもりだったのだろうか。明らかに嫌そうな顔をして、エルザが扇を口元に当てる。

なるほど。このお嬢さまは人をいたぶってからかって、高みの見物をするのが好きな女子なのだろう。

ハティは即座に、「我儘な人形（自分が一番）」と彼女の評価を書き替えた。

「珍しい色合いだと、言っただけだ。傷つけたのなら、済まなかったな」

ふっと、憐れみを込めた眼差しで見られる。というより、見下される。だが、ハティにしてみれば、別に取り立てて拾い上げるような事でもない。

「いえ、別に」

「……………」

くっく、と肩を震わせて隣に立つルートが笑う。ぎ、と兄を睨みつけてエルザはぱちん、と扇を鳴らしてそっぽを向いた。

「それで？お前は何故この人気のない界隈を散策していたのだ？」

だらしなくクッションにもたれかかり、エルザは告げる。視線は壁に向いていて、ハティを見ていない。己を皮肉るような言い回しに、ハティはどうこたえるべきかと一瞬思考を巡らせて、それから、面倒になって単刀直入に切り出すことにした。

「私はただの旅人で、探し人の気配がここからするから、なんとかしてお尋ねしたいと思って歩いていただけです」

まさか、不法侵入しようとしていた、とは言えない。

「探し人？」

くるん、と鶯色の瞳が動き、ハティに注がれる。頷く彼女に、エルザは扇をルートに差し向けた。

「それは、この兄者か？」

「さあ……」

「……………では、ディアナか？」

「どうでしょうか」

「……………」

あからさまに不審げな眼差しをハティに向け、続いてエルザはルートを見た。ハティの斜め後ろに立っていた青年は、肩をすくめる。

「僕は庭の折れた枝が、彼女に危害を加えるところだったお詫びの為に、館に招待しただけだよ」

「どうみても不審な者をか？」

「どうみれば、彼女が不審に見えるんだ？」

涼しい顔で尋ね返すルートに、エルザは黙る。「血の色の髪」という部分を除けば、別段変な部分はない。盗賊のように身なりが悪いわけでもないし、受け答えも教養のある人間として申し分ないもの。良心的に見える人間が、はたして良心的なのか、という疑問がわくかもしれないが、取り立てて不審者扱いするような人間には「見えない」し、そもそも、ルートが独断と偏見で彼女を館に招待したのだ。

ここにきて、ハティの素性にたいしてとやかく言うのはお門違いだろう。

「お前の話を聞く限りでは、人を探しているにもかかわらず、その人物をよく知らないように聞こえるな」

身を起こし、じっと鶯色の瞳で見詰めるエルザに「そうなんですよ」とハティは眉間にしわを寄せて答えた。

「確かに私はその人を知ってます。けど……それは前の姿で、今はどんな姿かたちをしているのか、私にはちょっと判らないんです」

「姿変えが出来るのか？」

更に身を乗り出すエルザに、ハティは「ええまあ、一応」と答えを濁らせた。

姿変え。

それは魔女でなくても、法術師でも使える術の一つである。自らの姿を、任意のものに変化させる。それは物であっても者であっても、生物で有っても構わない。この世に存在するものになれば姿を変えることが可能なのだ。

ただ、「者」にだけは制限が有る。

同一時空間に二重の存在は認められない。

空間に二重に存在することは、精霊のタブーに触れ、ペナルティをもらう。

法術師が人間に姿を変えるには、姿を変えた存在が「確実に世界に存在しないこと」が絶対条件だ。自分の想像が生み出した存在に変わるのなら構わない。だが、誰か……たとえば自分の友人知人に姿を変えることは、絶対にしてはならない。

出来るとすれば、唯一つ。

「……この館に住まう人間は、誰も死んでなどおらん」

すっと目を細めるエルザに、「はあ」とハティは曖昧に答えた。

この世に「居た」人間……すなわち、「もう居ない」存在になれば、姿を変えることが出来る

。「姿を変えるに値するものは、なにも人間だけではありませんから」

「法術師とは不気味だ」

たとえば、その花瓶とか、と指をさしながら告げるハティの台詞を遮り、エルザは忌々しそうに眉間にしわを刻む。

「まあよい。そのように不気味な存在が、何故この館に居る？」

我々の知り合いか？

エルザの質問に、ハティではなく、ルートが首を傾げた。

「法術師の知り合い……なんていたかな？」

記憶をひっくり返して、どうだったかな、と考え込むルートを余所に、ハティは肩をすくめた

。「その者が貴方達を知っているのかいないのか、それは私にも判りません。ただ、ここからその者の気配がする。だから、私はここに来て、居るのか居ないのか、どこに行ったのかを調べる。それだけです」

断じるハティに、エルザは呆れたように、抱えあげたクッションに頬杖を突いてハティを見た

。「お前、今までそんな強引な理屈で旅を続けてたのか？」

十分に不審者ではないか。

鼻で嗤われ、確かに自覚のあるハティは苦笑した。普段、余り考えたことが無いのは、自分の連れの所為だろう。

シャーロックは何も気にしない。全てが自分を中心に回っているからだ。

己を罵倒する、あるいは邪魔する者には、三千倍返しを。

「そりゃまあ、色々ありましたよ……そりゃ、もう……ね……」

脱力するハティの反応が、やっぱり面白くないエルザは苛立たしげに扇を鳴らして、「で？」とハティを見た。

「お前の探している法術師は、本当にここにおるのか？」

さあどうだろう。

直ぐには、彼女を気配を感知することはできない。それなりに意識を集中しないと、ここにいるのか居ないのか、はっきりしない。

「探してみないことにはなんとも……」

「なら自由に探してみると良い。結果が出るまで、滞在しろ」

ぱちん、と扇を鳴らしてエルザはにやりと笑った。

「エルザさま」

それに、異を唱えたのは今まで部屋の隅に畏まって控えていたメイドのレディ・ディアナだった。肩までの綺麗な黒髪に、涼しげなブルーアイ。黒の衣装とエプロンの所為で、黒づくめに見える彼女は、きっとハティを睨んだ。

「素性の知れない者を、意味の判らない理由で滞在させるなどもっての他です」

誰かの紹介状か何かあれば別ですが、彼女の言う事がどこまで本当か、知る術は我々にはないのでしょ？

眦をきつくして告げられて、まあ確かにそうだよな、とハティは頷く。

この世の中は「良い人間」だけで構成されているとは言い難い。どちらかという、不審人物の方が多いただろう。この屋敷を護るディアナとしては当然の言動だろう。だが、「我儘人形（自分が一番）」のエルザは納得しない。

「別に構わないだろう。盗まれて困る様な調度品など、全部叔父上達に持って行かれたからな」

「エルザさま！」

声を荒げるディアナに、「事実だろう」と何でもないようにエルザは答えた。だがその瞳に、抑えがたい暗い感情が滲んでいるのが、ハティにも見て取れた。

多分、この屋敷の主が亡くなった際、古い屋敷だけを少女に譲渡し、金目のモノをかっさらった親戚とかが居たのだろう。

別に無い話じゃない。良くあることだ。だが、「良くあること」なんて笑い飛ばせないのが当事者だ。

当事者にとってはそれがどこまでも「真実」になる。15の少女の瞳に滲む黒い影も、仕方ないものだろう。

「滞在、なんて大げさな事はしなくても良いです。街中に宿が有りますし。けど、良ければこの屋敷を調べることを許してもらえませんか？」

「お前の厄介な探し人など、知った事か」

ぴしゃりと言い切るディアナの肩を、いつの間にも移動したのか、ルートがぽん、と抑える。はっと顔を上げるディアナが明らかに不快を全面に押し出してルートを睨みつけた。

「まあ、そう言うなって」

困ってる人間を助けるのが人の道、ってものだろう？

にここに笑うルートと、にやにや笑ってハティを見るエルザ。その二人を交互に見やり、ディアナは本当にしぶしぶ、と言った表情で溜息を吐いた。

「お二人が……そこまでおっしゃるのでしたら。ただし、私の監視の元、私の許可した部分だけをお調べ願いますよ」

じろり、と睨みつけられて、ハティは「もちろんです」と涼しい顔で答えながら、内心ガッツポーズをとっていた。

これで本当に、あの我儘・尊大・傍若無人のシャーロックを出し抜く事に成功したのだ、と。

屋敷内の魔女探索は明日からにして、ハティがそこを出たのは、日も傾いた夕方のことだった。

お茶をご馳走になり、我儘人形（自分が一番）のエルザがせがむままに、旅先での景色や出来事なんかを語ったりなんだりで、結局何もせずに今日のところは暇をつげたのだが、優雅に流れていた羊雲が、その縁を金色に輝かせているのを見て、多少なりとも連れの仕事が気になった。

相変わらず人気の少ない通りは、中心地に向かって緩やかに下り、道なりに植わった樹の向こうは、数件の屋敷と民家、それからなだらかな丘が続いていた。徐々に近づく背の高い建物や、時計塔、己の髪と同じ色の空を眺めながら、「正攻法が駄目なら裏ルート」と断言していた男が、一向に現れなかった事に、ハティは奇妙な感情を抱いていた。

（てっきり一人で訪ねてくると思ってたのに……案外、どうしようもないやつなのかしら）

いくらか涼しくなった夏の風が木々をざわめかせ、ハティは大きく伸びをする。

（ていうか、この時間の間、何してたのかしら）

目抜き通りに出ると、途端に活気にあふれる。飲食店からは、焼肉の香りがする煙や、野菜や果物の店先には、籠を持った女性たちで溢れている。早くも宴会を始めている居酒屋の、屋外のテーブルの横を通りながら、ハティは宿を目指した。

平原の都「ホーリーホック」。

テール大陸の中心にある、レイリーフ王国王都イーヴィーから、東に広がる山脈を越えると、ナルブ平原に出る。その平原の北に、ここホーリーホックの街は有った。

ホーリーホックは昔から、ナルブ平原をゆったりと流れる大河から採れる金で有名な街だったが、最近では法術師の精霊との契約に有効視されている、「アンバー」が採れることで有名になってきていた。

アンバー。

その名の通り琥珀だが、ここでいうそれは大分違う。

精霊の涙、と呼ばれる黒曜水。それは川や湖、泉、海などに存在しながら、普通の水分とは全く異なる物質である。

雨上がりの水たまりによくあらわれるそれは、普通の水とは違って、夜の空を映したように、暗く、黒く、透明で深い色合いをしている。その水は人が掬いあげる傍から霧散し、形をとどめておくことは叶わない。だが、そこに「なんらか」の力が加わることで、黒曜水は凝り固まり、一見すると黒く見える鉱石へと変貌するのだ。

だが、手にとって覗き込めば、それはどこまでも純度が高く透明で、何故黒く見えたのか疑うほど透き通るのだ。

夜の闇を固めたような黒で有りながら、明るい日の光を思わせる琥珀にも見える。

それが、アンバーと呼ばれる石だ。

何が作用して、黒曜水が変貌するのかは、判っていない。ここで採れる言う事は、この平原の土地の何かが作用しているのだが、今もって不明瞭だ。だから、人工的に作り出すことが叶わ

ない。

そうなる、必然的に「アンバー」が、ホーリーホックの工業品となり、街の発展につながることになる。

(何でもかんでも売りさばく……か)

法術師のはしくれで、修行の果てに精霊の好みそうなものをようやく見つけることの出来たハティは、夕景の中そびえたつ、煉瓦造りの、塔を三つほど有した、巨大な城のような建物を見上げた。

ホーリーホックの繁栄を一番に象徴している建物。

「アンバー」の採掘と加工、販売を一手に担う「ファーラーデ」の建物だ。

組織を作り、発掘形態を整えることで、採掘が難しく、個人で搾取されていた「アンバー」が効率よく採れるようになった。その為、「アンバー」自体の値段が下がり、見習いの法術師でも頑張れば手を出せるような値段になったのだ。

そうなってくると、法術師が一人前になるために、一番のネックになる「精霊との契約」が比較的しやすくなり、結果、絶対数の少ない法術師が増えることとなった。

便利な力、というものは、重宝されるし、「人の役に立つ為に」しか使役出来ない力なのだから、疎ましがられることもない。

法術という力が、「有ってお得なステータス」になってしまいそうな原因が、この「アンバー」の安価供給にあると、ハティの師匠は嘆いていた。

ハティ自身、修行を積んでようやく精霊の好むものを見つけ出して、契約をしている。

最初から好かれそうなものを手にして、力を得るのは邪道だと言う認識も、実は有ったりする。

だから、ハティの視線の先に有る建物は、どうにも胡散臭く見えて仕方なかった。

不貞腐れたような視線で巨大な建物を見やり、目抜き通りに広がる「アンバー宝石店」を苦々しく見やりながら、ハティはもくもくと帰路を急いだ。

クロスロードさまにお荷物が届いております。

そう告げて、郵便屋が噴水から「引き上げた」のは、身の丈ほどある鏡だった。

それに、シャーロックは驚くを通り越して呆れ、最終的には怒りにまかせて叩き割ろうかと考えたほどだった。

だが、割ろうにもどうやら面倒な封印が掛けられているらしく、苛立たしさの絶頂で、彼は宿屋のホールにふんぞり返り、アイスコーヒーをすすっていた。唐突に送りつけられた身の丈程の鏡は、彼の向かいの席に設置されている。

郵便屋を捕まえることで、連絡を取りたかった相手と繋がることは出来た。だが、その代償に要らないモノを押しつけられた。

不機嫌そうにそれを睨んでいると、からん、とドアベルの涼やかな音が鳴り、彼の連れが一人

入口から入ってくるのが見えた。

「ハティ・フローズニル！」

「！？」

大声で呼びつけば、びくりと肩を震わせた彼女が、こちらを振り返る。とたん、見る見るうちに、ハティの顔色も不機嫌に染まっていった。

「なにのんきに一人でアイスコーヒーなんか飲んでんのよ」

「お前こそ、何勝手に行動してるんだ」

じろっと睨みつける碧眼に、しかしハティは怯まない。怯むどころか、多少の余裕を見せて鼻で笑って見せた。

「何って」

私は私に与えられた仕事を全うしてただけよ、と続けようとして、ハティは一人掛けソファにふんぞり返るシャーロックの向こうに有る、身の丈程の鏡に目を見開いた。

「……ナニアレ」

「巫女からの贈り物だ」

吐き捨てるように告げるシャーロックに、「え？」と驚いた顔をして、ハティは連れを見た。

「巫女って……もしかしてベルベッドさま？」

巫女。

それは精霊王に使える者たちの総称である。

レイリーフと言わず、世界のバランスをつかさどる精霊は、さまざまな「現象」の全てを司っている。よって、数え切れないほどの彼らが、世界中に満ちている。

だが、それらの存在もただ、無秩序にあるのではなく、四大元素の風水火土と、その上に存在する光と闇。さらにそれを束ねる精霊王に大まかに分けることが出来る。

精霊王は唯一の魔女と拮抗する力の存在であり、巫女は精霊王を祭り、世のバランスを保ってもらえるよう祈りをささげ、人を導き、更には法術師の認定も行っている。

なかでもベルベッドは王都イーヴィーにその人有りとうたわれるほどの、並ぶものが居ないほどの法術使いで、尚且つ高位巫女だ。精霊王と会話が許された人間で、王族からも絶大の信頼を得ている。

そんなとてつもなく偉い巫女、ベルベッドは年齢不詳だった。

外見年齢は、二十代後半。紺色を思わせるような、艶やかな黒髪を美しく結いあげ、紅玉のような瞳が特徴的な美女は、その肉体もたぐいまれなるプロポーションを誇っている。

巫女、というからには清楚可憐な、それこそジュリエッタのような人間を想像していたハティは、彼女から法術師の認定書を頂く際、絶句してしまったのだ。

なんという……妖艶な女性なのだろうか。

広くデコルテの開いた黒のドレスと、そこからはみ出さんばかりの豊満な胸。長く黒い睫毛に縁取られた瞳は妖しく紅く、銀の冠を額に付けたベルベッドを、ハティは忘れられない。

実際、世の男性どもを虜にして止まないらしく、噂では精霊王に仕えているにも関わらず、その身で手玉に取った男は星の数ほど居ると言われていた。

ただし、現在彼女は、王室や巫女の記録などから、どう軽く見積もっても齢九十を超えている筈で、今更彼女にモーションを掛けるような男がいるのかどうか……というのがもっともな評価であり、更に九十歳以上という点から、ベルベットの処女性なんかもはやどうでもいい、という、世の女性が聞いたら反論しそうな結論が導かれ、囁かれていたりもする。

それでも、彼女と噂になる男が居ないこともない。

「……………まさか貴方……ベルベットさまと」

「それ以上言ったら斬り殺すからな」

こんなところまで貢物が、と呆れた眼差しを送るハティを睨みつけて、シャーロックは足を組んだ。だらしなく頬杖を付いたまま鏡を見遣り、「封印されてるらしく割れない」と忌々しげに吐き捨てた。

「……割ろうとしたの？」

「ああ」

「なんで？」

「邪魔だろ」

「……………」

なんて罰あたりな！

全ての法術師の頂点に立ち、王族からも信頼されている女性が、わざわざ送ってきたモノを、邪魔で片付けるとは。

口をぱくぱくさせるハティに気付かず、シャーロックは洗面で溜息をついた。

「あのふざけた女は何を考えてんだか。こんな邪魔にしかない巨大な物体、持って旅なんぞ出来るわけないだろ」

「だからって、割ろうなんて余りにも短絡的だわ」

ああでも、単細胞のシャーロックにはお似合いな案かしら。

「……………」

ぎろ、と音がしそうな眼差しを向けられるも、ハティはがっつり無視して彼の向かいに鎮座する姿見へと近づいた。

近寄って見てみても、特に変わった様子もない鏡に、ハティは眉間にしわを寄せた。

鏡、というのもよく、精霊との契約に用いられたりする。だが、大抵はもっと凝った装飾が施されていたり、綺麗な絵が描かれていたりで、こんな唯の木枠に磨かれた板が嵌っているようなものは、契約の代償として相応しくない。

それなのに、そっと掌を近づけると、腕の産毛が逆立つような感触が肌を這い、きっちりと封印が施され散るのが判った。

(何の変哲も無い鏡なのに……どうして?)

どうやって解こうかと、椅子の後ろに回って木枠に手を掛ける。慎重に持ち上げると、一枚の紙が鏡の背に張られていた。

どうやら伝票のようだ。

「シャーロック、受け取り伝票付いてるわよ？」

何の気なしに剥がして、向かいに座る男にひらり、と振って見せれば、一瞬でシャーロックの顔色が変わった。

「ばっ……お前、それっ！」

「へ？」

席を蹴って立ち上がるシャーロックの剣幕に、慌てて己が持っている「伝票と思しき」紙に視線をやれば、「受取人」の欄にぶわっと炎が立つのが見えた。

「あ」

きらきらと光を撒き散らし、一際目に眩しく輝いたのち、流れるような金字でハティの名前が書き出されていく。

最終的には、「契約完了」の銀字が浮かび上がり、ハティは嫌な予感がした。

「お前……それでも本当に法術師なのか？」

彼女の手から「伝票」をひったくり、半眼で見下ろすシャーロックに、ハティは言葉に詰まる。

「……もしかして」

「もしかしなくても、契約書だ」

これくらい、法術師じゃない俺だって判るぞ。

盛大に「呆れました」と態度で示されて、ハティは更に言葉に詰まる。

「もしかして……トンデモナイ契約内容だったりする？」

首の辺りを搔きながら、契約書に目を通していたシャーロックが、「今のところ、魂と引き換えに、とは書かれてないな」と素っ気なく応じた。

「そんな内容だったら困るじゃない！」

「当たり前だ、馬鹿！だから慎重に扱って言ったろ！」

「言ってない！封印されてるのを叩き割ろうとしたとしか、言ってない！！」

「封印って時点で、何かあるって気付くだろ！？お前、本っ当に何も考えてないのな！！」

「なんですって!？」

何も……それこそ後先考えずに行動するのはシャーロックの方じゃないか。

日ごろの不満が濁流のようにハティから放出されそうになったところで、「まあまあ、お前達」とのんびりした声が耳を打った。

「契約の代償は、その綺麗な髪。それで手を打とう」

言い合いを続けようとしていた二人は、はっとして振り返る。椅子に鎮座していた鏡が消えて、なんだかおかしい格好をした男が一人、ふんぞり返るようにして一人掛けのソファに腰を据えていた。

「……………」

夜の闇を集めたような、藍色の長い髪を、頭のとっぺんで結いあげ、明るい紫の布がリボンのように結ばれている。麻で出来た長衣に足首が見える長さの黒いズボン。サンダル履きに手には節目もごつい、樹の枝と言っても差し支えない長い杖が握られていた。

唐突に鏡の代わりに現れた男を眺め、言葉を失くしていたハティが、はっと我に返った。

「あ、あなた……もしかしなくても……」

「私は鏡の精霊で、名をローレルと言う。よろしく、綺麗な髪のお嬢さん」

啞然として突っ立っている彼女の手を優雅に取りあげ、その甲に口付ける。

流れるような動作に、ハティは目を大きく見開いた。精霊と言えば、積極的に人前に姿を現さないものだし、人間のしきたりなど知らないモノの方が多い。なのに、この突然現れた青年に、きちんと女性を扱うような態度で接せられて、少なからず驚いたのだ。

世慣れしていると言うか……本当に精霊だろうか。

もしかしたら、鏡に憑いていた幽霊とか、そういう方が正しくないだろうか。

すりすり、と取られた手の甲を、ローレルの指先で撫でられるままになりながら、ハティは全然別の事を考えて眉間に皺をよせる。

「で、何だって貴様はこんなところに出てきてるんだ？」

シャーロックの飲みさしのアイスコーヒーに手を伸ばす青年から、己のグラスを遠ざけて、不機嫌そうに彼が切り出す。じろっと睨みつける視線に殺気が籠っていた。

警戒している、とかそういうのよりももっと強い……嫌悪にも似た感情。

(あれ?)

シャーロックって精霊とか幽霊とか嫌いだったっけ?

どっかりと己のソファに戻り、足を組んで、精霊すらも見下すシャーロックに「あれは嫌いとかそういうんじゃないで、自分より高位のものを認めたがらない態度だ」とハティは結論付けた。

「そうですよ。精霊って、余り人の目に付きたがらないですし、人の形を取ることも珍しいのに……」

アイスコーヒーを興味津々に見詰めながら、「まあ、大抵のモノはそうだろうな」とローレルはあっさりと言い切った。

「だが、あの大きさの鏡を持ち運ぶのも大変だろうし、なによりベルベットから頼まれたしなあ

」

あのコーヒーというのを私にももらえないだろうか。

にこにこ人よさそうな笑みを浮かべるローレルに、ハティは毒気を抜かれた。封印までされていたのだから、どんな厄介事かと思ったが、なんだか人よさそうな精霊だ。

……人かどうか不明瞭な相手に、「人が良い」というのも変な話だが。

だが、彼女の連れはそうではなかったらしい。ベルベッドの名前を聞くや否や、あからさまに嫌そうな顔をして舌打ちをする。

「あのババァから何を頼まれた」

「ちょっと、シャーロック！！！」

仮にも相手は最高位の巫女で法術師なのだ。自分の職業の頂点に立つ人物に対して、そんな口の利き方をを認めるわけにはいなくて、ハティは声を荒げた。

近寄って、抗議の一つでもしようとしたところで、その手首をローレルに掴まれた。

ひんやりとした感触。それと同時に体内の血液が、掴まれた場所に集中していく。くら、と眩暈がするような感覚に、ハティは咄嗟にローレルの手を振り払った。

「っ」

「ああ、すまない」

ぱ、と両手を広げて見せて、「私は虚像の精霊だからね」と悪びれもせずに笑った。

「嘘と本当を取り変えるところだったね」

「え？」

ごめんね、と哀しそうに眉尻を下げたのも一瞬で、ハティが意味を問おうとするより先に、「君たちはロツテロッドを探してるんだらう？」と再びにこにこ笑顔で切り出した。

「私が扱うのは嘘と本当。ロツテロッドがどんな姿で、どこにいるのか、私なら直ぐ分る」

「奴を探すのはこの女の役目だ」

すっぱりと言い切るシャーロックに、ハティは目を丸くした。

「一応、認めてくれてたわけ？私の役目」

思わずぼろっと零れた、心底意外だと言いたげなハティの台詞に、シャーロックは「それ以外に何の取り柄が有るんだ、お前」とぼっさり切り捨てる。良い意味で感動しかかっていたハティは、その評価を瞬時に元に戻した。

「お前の手を借りる必要もない。さっさと鏡に戻れ」

「そう言わなくても。どっちだって一緒な筈だろう？お嬢さんがロツテロッドを見つけるのも、私の力を使役してロツテロッドを見つけるのも、どちらもお嬢さんがいなければ出来ないことだ」

それに、どうしたって君には探し出せない。

涼しい顔で切り出すローレルに、微かに、カップを持つシャーロックの指が震えた。伏せられていた視線が、先ほどの比じゃないくらいの怒りに汚染されて持ちあがる。

「誰が、何だって？」

「本当のことを言われて怒るのは、子供の証拠だよ」

「子供だろうが大人だろうが関係ない。俺がしたいのは、ロツテロッドを見つけ出して、この手で葬ってやる事だけだ」

すっぱり言い切るシャーロックに「なら、尚の事使えるモノは使った方がいいんじゃないのかなあ」とローレルがのんびりと答えた。にこにこ笑いながらも、シャーロックを言いくるめようとする。

「……………」

二人の間にある、微妙に掛け違っているような空気に、ハティは気付いた。それと同時に、ある種の親しみのようなものも。

(ローレルとシャーロックって、知り合い同士なのかしら…………)

それを訪ねるより先に、ふん、と鼻を鳴らした男が、偉そうにソファにふんぞり返った。

「確かにそうだな。使えるモノは使う。目的の為に、例え、俺が嫌いなものでも、な」

にやり、と笑って見詰めるシャーロックの、険のある碧眼を受けとめながら、ローレルも崩すことのない笑みで「理解してもらえて良かったよ」と受け答えた。

「あの…………」

「ん？」

なんだい、私の綺麗なお嬢さん？

「……………」

その総称はどうかと思うが、彼はうっとりとした眼差しでハティの夕焼け色の髪を眺めている。精霊は「綺麗な」モノに固執する。…………場合によっては偏愛する、といっても過言ではない。

(この髪を切れとかいうのかしら…………)

思わず自分の髪の長さ確かめるように手で触ると、ローレルが「そのままでもいいよ」と頬杖を突きながら答えた。

「たまに、触らせてくれればそれでいい」

「はあ…………」

まあ、それくらいならいいか。

周囲に花を飛ばしそうなくらい、浮かれて嬉しそうなローレルに、なんとなくシャーロックと知り合いなのかを聞きそびれたハティが、つられて笑っていると、当の本人が不機嫌そうにウェイターを呼んだ。

「あそこの浮かれてる馬鹿どもに苦いコーヒーを一杯ずつ用意してやれ」

夢を見た。

久しく見ていなかった、夢だ。

綺麗に整えられた庭園。そこにある噴水。そこから零れる水が、足首までしかない深さの川を作り、ガラスの橋がちんまりと掛っていた。

彼は歩いていた。

空は淡い水色で、太陽の光が妙に白っぽい。薔薇の垣根と木立ち。冷たい水の中を彼は歩いている。やがて、小さなベンチが見え、そこに彼女が座っていた。

(ジュリエッタ……)

名前を呼ぶ。すると、ゆっくりと彼女が振り返った。

ふわりと微笑んで、その桜の花のような色の唇が薄らと開き、名前を紡ぐ……。

そこで、目が覚めた。

「眠れない」

「……………」

「眠れないぞ、お嬢さん」

「……………」

「なんで眠れないんだろう!？」

寝台に横になっているハティは、部屋の中をうろうろと歩きまわる存在に溜息を吐いた。

「今、何時だと思ってんのよ……」

明日は午前中の日が高いうちに、エルザの屋敷を訪れる予定なのだ。早々に眠りたいハティは薄暗い部屋でゆっくりと身を起こした。ようやく眠りに着いたと言うのに、こう「不満・不安」なオーラ全開で部屋中をうろつかれては寝られもしない。

「大体精霊って睡眠とか必要なわけ？」

安眠妨害をされて、いささか苛立っていたハティが半眼で突っ込めば「それはそれ、これはこれだ」と立ち止まったローレルが言い切った。

「睡眠不足と言うのはお肌の大敵だと、ベルベッドから訊いている。私のこの玉のようなお肌がしわしわのしおしおになったら、困るだろう」

「……誰も困りやしないし、大体、ローレルは虚像の精霊でしょう?いくらだって人目を欺けるじゃない」

肩をすくめ、欠伸を噛み殺しながら言うと、彼はふっと意味深に笑った。

「私は虚像であり真実であるからな。真実足り得ないものは虚像にもならない」

「……………?」

半分眠っている脳内では、彼の言葉は理解不能すぎた。大体、精霊というのは人と交わることが極端に少ないので、法術師といえども、彼らと会話をするのは至難の業なのだ。

ローレルが異様に人慣れしているから、普通に会話が成立しているが、時々彼の告げる言葉の意味がとれない。

ぼうっとローレルを見詰めるハティに、彼は何かを言い掛けて、結局肩をすくめた。

「ま、真実があるから虚像があるということだな、うん」

そして、今私が直面している真実は、眠れないと言う事なんだよ。

嘆くようにそう告げて、両手を握りしめて床に崩れ落ちるローレルに、そんな仕草を教えたのはやっぱりベルベットだろうか、彼女はどうしても良い事を考えて、そのどうしてもよさ加減に、もう寝よう、と再び寝台に横になった。

「それは多分、シャーロックの馬鹿が頼んだコーヒーの所為よ」

布団に横になってればそのうち眠くなるでしょうし、ていうか、あんた精霊なんだから、鏡に戻りなさいよ、鏡に。

最終的には「あんた」呼ばわりで、ハティは煩そうに片手をひらひらと振ると、聞こえないふりを決め込んだ。だが、世慣れしているくせに、意外と俗っぽい事を知らないローレルは、「コーヒーの所為？」とこてんと首を傾げた。

「何故コーヒーの所為なんだ？」

「眠れなくなる成分が豊富に含まれている飲み物だからよ」

「あの……苦くて飲めたものじゃないお湯がか？」

「情緒のない言い方ね……」

「香りは良かったんだがなあ。味で損をしているよな、あのお湯」

「だからお湯って言い方は」

「なら、シャーロックが眠れないのもコーヒーの所為かあ」

ふむ、と顎に指を当てて考え込むローレルに、ハティは「え？」と睨りかけていた目を見開いた。微かに身体を起こすと、気のない素振りでは彼はドアの方を見ている。

「眠れてないの？」

「奴は隣だろう？今さっき出て行ったぞ？」

「……………」

ベッドの傍に有る窓に引かれているカーテンを開けて、ハティは外を覗き見た。宿の二階の、南向きのその窓の、真正面に半月が見える。寝る前に見た時は、窓の左側に掛っていた筈だ。大分月も沈もうとしている、こんな夜更けに、一体どこに行こうと言うのか。

「眠れないときは散歩が有効か」

窓から、下に広がる宿屋の中庭を見詰めていたハティは、ぽつりとつぶやいて部屋を出て行こうとするローレルを慌てて振り仰いだ。

「って、ちょっと!？」

「コーヒーの所為で眠れない。歩いてくる」

「はあ!？」

「ついでに、土産も買ってこよう」

「ちょ……ま」

制止も聞かず、ローレルはハティの部屋のドアを「開けることなく」素通りした。

「……………」

相手は精霊で、人間の常識は割と……というか、大分通用しない。自分は明日早いのだし、訪問の予定が有るし、そもそもそれがハティに課せられた使命のようなものだ。

勝手に「送りつけられてきた」精霊を心配してついて行く、なんてアホらしい。

そうそうに結論付けて、ハティはぱたり、とベッドに倒れ込むと再び上掛けに包まった。今度こそ朝までノンストップの睡眠がとれるように、深々と深呼吸をしながら。

「助けてくれ……」

尻もちを付いた男が、がたがたと震えながら後ずさる。どん、とその背中が、煉瓦塀にぶつかり、もともと悪かった顔色が更に落ちた。目に見えて白い男の指先が、足掻くように石畳を掻きむしり、それ以上後退出来ないのに、なんとか相対する相手と距離を取ろうとしていた。

「無駄な事をするねえ」

小さく呟き、ふん、と鼻を鳴らして、その者は男の足元に放り出されている「アンバー」に視線をやった。

黒い鉱石は、雲間から顔をのぞかせた半月の光に、琥珀に輝く。じっとそれを見詰めた後、無造作に歩を詰めて、その者は「アンバー」を拾い上げた。

月明かりに透かして見れば、小さな亀裂が入っているのが見えた。

すっと、一直線に。割れて碎ける前兆のように。

「……人の為になる行為、か」

口の端をにやりと引きあげて、その者が、「うわあああ」と悲鳴を上げて、煉瓦塀に縋りつく男に愉快そうな視線をやった。

「ねえ……これ。これ、お金になるから奪ったんだろうけど」

結局善意ある行為じゃないと、これは解放出来ないんだよ？

「し、しし、知ってるさ！知っている！！けど……それは高く売れるんだよ！！」

「……………解放できないのに？」

何度も煉瓦塀をひっかけ、爪が割れ指先から血が滲む。それでも男は、一層、滑稽なほど慌てふためいて塀をのぼろうとする。

「ねえ」

「ひい！？」

ばきや、と甲高い音を立てて彼が掴んでいた煉瓦にひびが入る。静電気で弾かれたような鋭い痛みを手を引き、真っ青な顔の男が振り返った。

「解放できないのに、なんで高く売れるんだ？」

「……………いに」

「ん？」

「実験……に……必要なんだって……せ、せせ成功すれば……高く売れる……し買ってくる……」

「……………」

引きつった喉。ネバ付いた口内。それを必死に押して、掠れ切った声で告げられた男の話に、その者は軽く目を見張った。

金に輝く長い睫毛に覆われた、翡翠の瞳が、月光を浴びてきらりと光る。

「もしかして……『アンバー』を作るのに必要って意味かな？」

でもそれって矛盾してない？「アンバー」を作るのに「アンバー」を使用していたら、意味ないよね？

「善意……」

「？」

「善意が……善意で善意を善意に……」

「……………」

あらあ、狂っちゃったかな。

必死に足掻いていたその全身から力が抜け、へたり込み、ぼうっと焦点の合わない眼差しで宙を見詰める男に、拾いあげた「アンバー」を手で弄びながら、その者は、短い金髪の襟脚を撫でた。

「強すぎる力って言うのも、使い勝手が悪いんだよね……」

やれやれ、と肩をすくめて嘆息すると、その者はくるりと男に背を向けた。

ちらり、とその翡翠の瞳が見上げたのは、再び雲に隠れようとしていた月が、ぼんやりと照らした巨大な三つの塔だった。

じっと見詰めて考え込む。脳裏に閃いたのは、暗い一室と、甘いような腐臭だった。

「……………まさか、ねえ」

その時、夜の静寂を撃ち破って、警笛が鳴り響いた。恐らく、この男が忍び込んだ民家の人間がようやく通報したのだろう。ばたばたと石畳を掛けてくる足音に、その者はふわりと唇に笑みを浮かべて、煉瓦塀に両手を置いた。そして、すっかり心を失くしている男に屈みこんで、ゆっくりと言い聞かせるように告げた。

「いい線いってるんだらうけど……多分、法術師じゃ逆立ちしたって無理だらうね」

そういうのは魔女とか精霊王とかの領域だよ。

「君の気が狂ったのって……もしかして、この『ひび割れアンバー』の用途がばれないように、ていう、君の雇い主が掛けた保険？」

ああでも、法術師って、人の為にしか動けないから……もしかしてこれは前科者に与えられたペナルティかなあ。あ、だったら君は前に一度、監獄のお世話にでもなったのかな？

「ま、どーでもいいけどねー」

笑いながら、その者は金糸の髪をふわりと揺らして壁に沈んでいく。前のめりに壁に飲み込

まれ、その者の左足が消える時になって、ようやく、光石のランタンを掲げた警官がその場に掛け込んできた。

一際大きな警笛が鳴り響いた。

次の日から、ハティによる屋敷の搜索が始まった。

彼女の来訪を快く思っていないレディ・ディアナに愛想笑いを振りまいて、ハティはローレルを連れて廊下を歩く。彼は誰だ、と無言で尋ねられて、ハティは「旅の連れです」と簡潔に説明しておく。

一人旅でないことは、すでにルートに説明済みだ。男の人と二人旅、だとかなんとか、ディアナがぶつくさ言うのをさっくり無視して、ハティは通された部屋から、魔女搜索を開始した。

「ここは、大奥様のお部屋でございました」

扉を開けた先は、がらんとして広く、南向きの窓から夏の日がさんさんと降り注ぐ、庭に面した大きな部屋だった。

色褪せた絨毯を踏んで部屋の中央に立ち、ハティは壁にある、白い跡に目を止める。

それは恐らく、著名な絵画が掛けられていた跡だろう。

金になりそうなものは全部奪い取られた、と暗い目をして語る少女を思い出し、軽く唇をかむ。天井のシャンデリアは取り外され、マントルピースの上には何一つない。残されているのはリビングに置かれた対のソファとテーブル。奥の寝室のベッドくらいだが、そのどちらも埃除けの白い布で覆い隠されていた。

そんな部屋でありながら、ただ、床も窓もぴかぴかに磨きあげられ、窓の棧には埃もない。

感心して見渡し、ハティはレディ・ディアナに視線をやった。

「この部屋……使ってないんですよね？」

「必要がない」

そりゃそうだ。この屋敷には二人しか住んでいないのだから。

愚問でしたね、と愛想笑いをしながら、ハティは興味深そうに室内を見渡しているローレルに目をやった。彼は首を折って天井を見上げている。

そこに何かあるのだろうか。

そう尋ねそうになって、ハティは口をつぐんだ。

魔女を探すのなら、私の方が有効だろう、と使役を促してきた精霊に、ハティは「取り敢えずは自分の力で探すわ」と答えていた。

今朝の朝食の席でのことだ。

案の定、シャーロックの姿はない。別行動なのだろうと勝手に決めて、ローレルには補佐と言う事で付いてきてもらう事にした。

彼は鏡の精霊。

真実と虚構を扱う。

だから、彼の言う事の全てが真実足り得ず、また虚構であるとも言い切れない、実に厄介な存在なのだ。要するに、嘘の中に真実が、真実の中に嘘がまぎれているようなものだ。

そんな精霊をほいほい使役するわけにもいかず、ハティは彼に鏡の姿になってもらって、持ち歩こうと思っていた。等身大の姿見ではなく、もっとコンパクトな手鏡くらいの大きさになって

。だが、妙に人慣れしている精霊殿は、それを却下した。

鏡になるのなら、姿見意外考えられない。姿見を却下するのなら人間型でなくてはならない。
(なんて面倒なもの押しつけてきたのかしら、ベルベッドさまは……)

胸を張って宣言された朝食の席での事を思い出し、ハティはげんなりする。だが、いつまでもそんな事に構っている場合ではないのだ。

今は、一刻も早く、魔女ロッテロッドの居場所を探りださなくては。物珍しげに室内を見渡すローレルを無視して、ハティはざっと部屋に視線を投げてそれからディアナを振り返った。

彼女は無表情でドアの前に立っている。

「……………あの」

「はい」

「出来れば、席をはずしてもらえると嬉しいんですケド……」

集中力が物を言う。

ロッテロッドを探し出す方法には二種類ある。

一つはハティだけが使う事を許された方法で、己の血を使い、視覚を閉じてその他の感覚でロッテロッドをキャッチする方法。

もう一つは一般的な法術師が、精霊や仲間の法術師を探す際に使用する「魔力」の痕を感知する方法だ。

ハティとしては、魔女も精霊も法術師も一緒くたに検索する後者の方法よりも、自分にしか使えない、血を使った感知の方がしたかった。だが、その絶対条件として「静寂」と「不介入」がある。

見知らぬ人間が居ると、ハティの中の「静寂」が乱れ、他の力の「介入」を許してしまう。そうなるとなかなかロッテロッドを感知できない。だから、ディアナには席をはずしてほしかったのだが、彼女はじろり、と冷たい眼差しでハティを見ると「それは出来かねます」と素っ気なく言い放った。

「……………」

「私はまだ、あなた達の事を全面的に信用しているわけではありませんので」

きっぱりと言い切るディアナに、ハティの笑顔が引きつった。そこまでストレートに言われるといっそすがすがしい。

「左様ですか……」

引きつった笑みの形のまま、言葉を発しハティは溜息を付くと、持っていたバッグを床に置いた。医師が診察用に持ち歩くような形のそれは、ハティの仕事道具が詰まっている。がま口になっている部分を外して、ぱっくりと鞆の口を開け、こまごまと仕切られたその中から、小さな瓶を取り出す。瓶の半分を満たしている、淡い黄色の粉。

それは、「立木の精霊」に作ってもらった「金木犀」である。

金木犀。

それは、一般にはモクセイ科の常緑木高樹を指し、秋に橙黄の小さな花をいくつもいくつも咲かせる植物の事を言うが、ここでいう、「金木犀」はちょっと違う。

「立木の精霊」が宿りし金木犀の花には、特殊な力が宿る。その花を砕いて作った粉を、任意の場所に振りかけて、金木犀の葉でこすると、魔力を持つ者が触れた痕がその場に金色の光と独特の香りを放って表れるのだ。

犯罪捜査時に、捜査員が血痕を探り当てる薬液と似ているそれを使って、ハティは魔女ロッドの痕跡をさがすことにする。

己の欲望に忠実で、困惑するシャーロックを見たい、という理由だけで、ジュリエッタを封印してしまったロッド。

唯一の魔女がどうしてこの館に居るのか、居たのか、判らない。判らないが、彼女の行動パターンなら何となく思い描く事が出来る。

(あの人なら多分、無機物に姿を変えたりはしないわね)

打算的で合理的。魔女は自分の立場を危うくするようなモノに姿を変えるとは思えない。そうになると、この館内を自由に出入りできるものに姿を変えた筈だ。

エルザの話から、死んでしまった人間は居ないと言う。だから、人間は却下。

と、すると……。

「不審者をこんな立派な部屋に通す理由ってなにかな？」

大きな窓を開けて、試しに窓の棧に粉を振りかけていたハティは、唐突に響いた、のんびりした口調にぎょっとなって振り返った。

にこにこ笑うローレルが、ディアナに話しかけている。

「立派なものか。ここにあった調度品の類は、全てエルザさまの親戚縁者の手で売り払われてしまって、見る影もない」

「……………」

ふん、と鼻で笑い、ディアナはすっと目を細める。室内を見回す視線は冷めて、温度が無かった。そんなディアナの態度に、ローレルは数度瞬きを繰り返すと「そう」とあっさり言い放つ。そのまま、すたすたと歩を進めて、彼は窓の棧に丁寧に粉を振るハティの横を通り抜けて庭に出た。

「あーっ！！！！」

「え？」

その時、しっかりと窓枠を掴んでしまったローレルに、ハティが絶望的な声を上げた。

「ちょ……なにすんのだよ、あんたーっ！！！！」

精霊をあんた呼ばわりするのが二回目のハティは、きょとんとして目を丸くするローレルに、涙目で訴える。

「ここっ！！今、ここに触ったでしょ！！！！」

「……………そうだな」

「そうだな、じゃないーっ！！！！あんた、私が何をしてるかわかってんの！？」

「え？」

「『金木犀』使って魔力痕を探してるのに、あんたが触ったら元も子もないでしょーっ！！！！」

ふるふると震えるハティに、「ああ」とローレルは悪びれもせずに、ぽん、と掌に拳を押しあてた。

「そっか。それはすまなかったな」

「……………これ、高いのに…………」

ハティが契約している「木立ちの精霊」の好む綺麗なものは、「海の絵ハガキ」。決して己が行く事の叶わない「領域」のそこは、全ての「存在」を魅了してやまないようだ。彼女の知る「木立ちの精霊」はそれを所望し、必死に綺麗な海の絵を探し出して、渡して、ようやく旅に出る前にこの「金木犀」を手に入れたと言うのに。

「だったら、私を使えばいい」

のほほんと告げる彼に、ハティは深く溜息を付いた。

窓の棧の痕跡は、ほぼローレルに上書きされてしまっただろう。人型を保って、堂々と渡り歩ける彼には、そもそも「領域」はない。

領域。

それは、精霊たちが己の力を振るうのに、適したフィールドの事で、先ほどの「木立ちの精霊」なんかは、力がそれほど強くないので、木々に囲まれた森や山からはなかなか離れる事は出来ないし、それ以外の場所で彼らを探し出すことはできない。

だが、虚像と真実を映し出す「鏡」の精霊ともなると、ウソとホントが入り乱れる人の中なんか、己が活躍するのに十分過ぎる「領域」になっている。

力の強弱で言えば、間違いなく強い。

魔女、ロツテロッドの痕跡となれば、彼よりもよほど強いかもしれないが、魔力痕は先も言ったように、精霊も法術師も魔女も一緒くたに表示してしまう。だから、ここで魔力痕が現れても、結局それがローレルの物なのかロツテロッドの物なのか判別が付かないのである。

それを知ってか、にこにこ笑うローレルに、ハティは恨めしそうな視線を送った。

「それはしたくないって言ったでしょ。あなたの使役は人生経験豊富で、嘘が見抜けて、更に上手に使える、男を騙す手管にたけた妖艶な女性じゃなくちゃ無理なのよ」

ベルベッドを暗に匂わせて、応酬するハティに、「ああ、なるほど」と妙に納得したようにローレルが頷いた。

「そうだな。ハティじゃちょっと役不足かもしれないな」

「……………」

「特に胸が」

「……………」

ベルベッドさま。殴っても良いですか？

ローレル、あんたね、とこめかみを引きつらせ、己の胸の発育具合を、ひそかに姉二人と比べて絶望していたハティが拳を固めるのと同時に、開け放った窓の向こうから、「にゃー」という可愛らしい声が聞こえてきた。

はっとして、彼女が庭を見る。

綺麗に整えられた芝生と、薔薇の茂み。その茂みの中で、金色の瞳がきらりと光った。

「猫！！！」

「ああ、あれはエルザさまの大のお気に入り、最近庭に住みつ」

「猫ーっ！！！！」

指を付きつけられ、ついでに上がった感嘆の声。がさり、と茂みが揺れる。ディアナの言葉を途中で遮ったハティが、その一步を踏み出すより先に、後ろ脚のバネを目一杯使った茶色の塊が、物凄いスピードでそこから飛び出し、四肢を震わせて庭の奥めがけて疾走して行く。

「待ちなさい！！！」

窓枠を蹴り、庭先に降り立ったハティが印を切る。心の中で問いかけてくる「風の精霊」に、ハティは己の音声で持って応えた。

「あの猫！！あの猫が、えーと屋敷の少女の傷ついた心をいやす唯一の存在だから、それを捕まえたいのお願いします力を貸して！！！」

「……………」

「あながち間違っていないよな？」

風の力を借りて、包囲網を作り上げるハティを、半眼で見つめるディアナに、同じように庭先に降り立ったローレルが笑いをかみ殺して尋ねた。

「ええまあ。捕まえようとして私とルートが傷だらけになりましたから」

ふーん。

にこにこ笑いながら、ローレルはそんな適当な理由で、笑って力を貸している風の精霊に目を細めた。

「ハティは……好かれやすい、のかな？」

目抜き通りを一本中に入り、箱型で二階建の集合住宅が集まる路地に行く。つきあたりの煉瓦塀の前で、シャーロックは足をとめた。

ほんの数時間前の真夜中に、捕り物が繰り広げられた現場である。

「……………」

しゃがみこみ、シャーロックは立ちはだかる煉瓦塀の下の部分を眺める。

ここで捕えられた男は、正気を失い、うわごとのように「善意」という言葉を繰り返していると言う。何を見たのか、何を聞いたのか、そして何のために民家に押し入ったのか、刑事の質問に対して、何一つ答えない。

眉間に皺を寄せて、朝刊で見た記事を思い出していると、不意に「ここは一応、犯行現場なんだけどお」と気だるげな声が出た。

首だけで振り返ると、シャーロックは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「割にはずさんな管理体制じゃないか」

再び壁に視線を向ける。溜息が背後からして、石畳を踏みしめる靴の音がする。

「ま、盗られたものはなにもないし？何の被害も出てないからねえ」

「なら、なんでお前が出張ってる？」

顔を見ようともせず尋ねるシャーロックに、おかしように笑って、「その女」が腰を落とした。

「何ででしょう」

「……………」

笑う女は、年の頃はシャーロックとそう変わらず、恐らく二十代半ばくらいだろう。肩までの緩くウェーブの掛った、明るい栗毛にオレンジっぽい茶色の眼差しはやや垂れ気味。そこが、彼女の印象を随分と柔らかく、童顔にみせていた。

そんな彼女の笑顔は人畜無害そうだが、実際は容赦ならない女だと、シャーロックは十分に知っている。

「恐れ多くも、敏腕と名高い刑事のコーネリア殿が、わざわざ王都から出張って、こんな所で潜入捜査をしている理由なんぞ、わたくしにはこれっぽっちも思い描く事ができませんね」

平坦な口調でそう告げて、立ちあがるシャーロックに、「そうねえ」とコーネリアが可愛らしく首をかしげて見せた。

大きな瞳が、猫のように鋭くなる。

「ちょーっと野暮用で」

「野暮用」

はっ、と鼻で笑い、シャーロックは改めて、コーネリアをひたと見据えた。

彼が昨日、連絡を取ろうと試みていたのが、この「人物」だ。取り敢えず伝言を残す事には成功したが、まさか自分たちと同じ場所に居るとは思わなかった。

一体彼女が何のために「ここ」に居るのか。

彼女の任務については知っている。それは魔女ロツテロッドをとっ捕まえようとしているシャーロックにも関わりが有る事だからだ。

「……あれが、目的なんだろ？」

腕を組み、シャーロックが顎で示したのは、塀の向こうにある三つの塔を有した巨大企業。温度の無い視線で見下ろせば、彼の威圧的な態度などものともせず「へらっ」とコーネリアが笑った。

「さあ？」

「……………」

ち、と舌打ちし、シャーロックはここにはもう用はない、と歩を進めてコーネリアの横を通り過ぎようとする。その腕に、真夏の午前中にありながらも、ひんやりとした彼女の手が触れた。綺麗に整えられた彼女の爪に、シャーロックの視線が落ちた。

「何も盗られたものはありません……と、被害者は申告してきた」

くすり、と小さく笑う。可愛らしい成りのくせに、言葉を紡ぐ紅い唇は妖艶だ。

「……………何が言いたい」

「さあって……ねえ」

腕を絡めて、シャーロックを見上げ、うふふ、と小さく笑う。彼女達「刑事」の制服である、白いコートは、見た目には暑そうだが、薄手で頑丈なクレスト地方の特殊生地が使用されているために、彼らの動きを制限するようなことはない。そのコートを羽織っているだけのコーネリアは、更に、中のシャツのボタンを挑発的に三つも開けている。

夏の暑さを緩和するためか、わざとなのか。顔に似合わないグラマラスな体型に、シャーロックは更に眉間の皺を深くした。

本当に趣味が悪い。

「言いたい事はそれだけか？」

「いいえ」

嫌な予感がする。

おかしくなってしまったというその男と、何も取られなかったと申告する被害者。

その二つの関係と、塀の向こうに見える、ホーリーホックの繁栄の象徴である企業。

それらを考えたいのに、有無を言わさない腕の力に、シャーロックはうんざりした。

「お前……俺が何のためにここに来てるのか判ってるんだよな？」

改めて問うシャーロックに、コーネリアはふわりと笑みを浮かべて見せた。

「ええ、まあ一応」

でも、別に一緒にお茶するくらいいいじゃない。

「ジュリエッタだって、そんなの浮気のうちに数えたりしないわよ」

のほほん、と告げられたコーネリアの台詞に、シャーロックは盛大な溜息を零した。

「何をやっておるのじゃ、お前」

半眼で見詰められ、広大な庭の、樹の根元に蹲っていたハティはゆっくりと振り返った。白い頬に残る爪痕。

痛そうなそれに、エルザは目を見張った後、高らかと笑い声を上げた。

「なんじゃそれは！お前、シロに嫌われたな！」

あははははははは。

腹を抱えて笑い転げるエルザに、どんどんハティの眉間にしわが刻まれていく。

寄りにも寄って、この少女に見られるとは。とんだ失態だ。

「シロ、ていう名前なの？あの猫」

割には茶色かった気がするのだが。

「そうじゃ。白い猫にシロと付けても面白くもなんともないじゃろ？」

「……だからって茶色の猫にシロってつけるのも面白いかしら」

黒い猫にシロ、なら何となく……何となく判らないでもないが。いや、どっちも同じか。

ぱたぱたとスカートの裾の泥を払い、ハティははう、と溜息を付く。風の精霊に力を借りたが、結局その包囲網を突破して猫はどこかに消えてしまった。今は木の葉の精霊達に搜索をお願いしているが、徒労に終わりそうな気もしている。

「この辺に井戸はあるかしら？」

ひりひりする頬ぺたを冷やしたいし、風の精霊に対価を渡さなくてはならない。

「屋敷の裏手に有る」

相変わらず真っ白なドレスに、ふわりとしたリボンが風になびかせる少女は、今の時刻の蒸し暑さと無縁な立ち振る舞いをする。

優雅に扇で示された方向に、走りつかれた足を踏み出せば、「なあ」と後ろから付いてきたエルザが、く、と彼女の髪を引っ張った。

「！？」

つん、と頭を引かれ振り返る。すると、間近に寄ったエルザが口元に、両の手で囲いをつくる。と少しだけ高いハティの耳元に顔を寄せた。

「ちょっとだけわらわに付き合ってもらえぬか？」

「え？」

「今、ディアナはお前の連れと一緒にいる。兄者は朝から外出中。わらわにとっては絶好のチャンスなのだ」

「……チャンス？」

なんのだろう。怪訝な顔をして、ハティは彼女の綺麗な薫色の瞳を覗き込む。そこにはきらりと抑えがたい好奇の色が滲んでいた。

「そうじゃ」

に、と可愛らしい唇を横に引き、エルザはハティの腕をとってぐるっと彼女の正面に回り込んだ。

「屋敷を出るチャンスなのだ！」

「エルザさま！」

ばん、と勢いよくドアを開けたディアナは「やられた」と唇を噛んだ。最初にエルザとハティが出会った、例の大きな部屋の中はがらんとして誰もいなかった。ソファには、エルザのふわふわのドレスが放り投げるようにして脱ぎ棄てられている。

彼女の後ろからのんびり付いてきたローレルは、ぎゅっと両手を握りしめる彼女に首を傾げる。

「どうかしたか？」

「エルザさまが脱走なさいました」

「脱走？」

ひょいっと部屋を覗き込み、ローレルはその中を一瞥する。それから、ずっと視線をディアナに落とした。

「エルザって娘、居ないのか？」

「見れば判るでしょう」

「……………だよね」

まだお体の加減もよろしくないと言うのに、とディアナは口の中で零すと踵を返した。そのままどこに行くのかと目で追いながら、ローレルはもう一度その部屋を一瞥した。

何が嘘で何が本当か。

本当と嘘の境目と言うのは酷く曖昧で、こと人が関わると更に見えなくなる。世界は虚構と真実だけで構成されている筈なのに、どちらも入り混じり複雑に捻じれてしまい、見えないものが多くなっている。

その中で、ローレルの目に映るものは、そのモノの事実だけ。

嘘も真実も関係ない。ただそこにある剥き出しの「モノ」しか映らない。だから、彼は虚像と真実を司る鏡の精霊なのだ。

そして、ローレルの目に映るのは、この部屋。

誰かが居たというのは間違いない。だがそれが一体「誰」なのか。

ローレルはふん、と息を吐くとしばらく考え込んだのち、後ろを振り返った。

「ディアナさーん」

そのまま叫び、早足で屋敷の玄関に向かう彼女を追いかける。

家探しには、彼女の許可が必要だからと、ローレルはちゃんと把握していた。

日よけの真っ白な帽子を被り、簡素なブルーと白のストライプ柄のワンピースを着た少女が、小走りに通りを歩いて行く。ほとんど屋敷から出た事が無い、と興奮気味に話す彼女は、商店街の露店を一つ一つ丁寧に眺め、あれが欲しいこれが欲しい、と持っていた財布から景気よくお金をばらまいている。

荷物持ちに徹しているハティは、そんな少女の様子に呆れるやら、同情するやら、なんだか複雑な感情を抱いていた。

「あれも欲しいな！」

「ちょっと！」

店先で珍しい果物を大量に仕入れ、途中で買った、可愛らし藤のバスケットにそれを詰めてハティに持たせたエルザが、二軒ほど先に有る肉屋に目を留めた。

店先で回転しているのは、がちょうの丸焼き。油が落ちて炎が上がるそれを、エルザは興味津々に見詰めている。

何が欲しいのか、一目瞭然だ。

「冗談じゃないわよ？あんなもの担いで炎天下を屋敷まで帰れるわけないしょが」

それでなくてもハティの荷物は多いのだ。

しかも食べ物ばかり。

えー、と頬を膨らませるエルザに、ハティは少しだけ眉間に皺を寄せた。

彼女は何故、こんなに食糧ばかり買い求めるのだろうか。

この年頃……まあ、自分も含めてだが、もっと可愛らしい雑貨屋さんなんかを覗きたくなるのではないだろうか。

そんなハティの思考をまるで気にせず、エルザはしばらく回転するがちょうを眺めたあと、「なら、そこの串焼きで我慢する」とぼつりと漏らした。過分に不服そうな色が混じっているが、ハティとしてはここで「がちょうの丸焼き」を許可する訳にはいかない。

焼きたての串焼きを手に、振り返ったエルザが一つをハティに差し出した。

「腹が減ったろ？これでも食え」

「はあ……」

炎天下に串焼き。

悪くはない。悪くはないが……出来ればどこか喫茶店でアイスコーヒーでも頼みたいところだ。

熱々の油が滴る串焼きを咥え、手には果物が詰まったバスケットと、エルザが買い求めたホーリーホックー美味いと評判のパン屋のパンがどっさり一袋。これが結構かさばるし、重たい。(出掛けて買い物かしたいっていうから、何かと思ったら……)

こんな食料品の買い出しって、ありなのか。

げんなりするハティを横目に、エルザは「なんだ？もう疲れたのか？」と口の端を吊り上げて笑った。

「いや……そういうわけでは……」

いや、疲れているのだろうか。なんか、そんな気もしてきた。

「ではどこかで美味しい物でも食べよう！そろそろ昼だしな」

奢ってやる。

胸を張る少女の様子に、ハティは更に立ちくらみがした。

まだ食べると言うのか。こんだけ食料の買い出しをして置いて、あんなに食べ物の香りが満ち溢れた通りを歩いて、買い食いを続けたと言うのに、まだ。

げっそりするハティに気付かず、エルザはうーん、と伸びをすると、串焼きを手にしたまま真っ青な空を仰ぎ見た。

「普段はディアナに色々口うるさく言われて、冷めた料理しか食べていないからな。こんなに沢山、腹いっぱい食べられるのは初めてだ」

「え？」

あっちにお洒落なレストランがあったな、とエルザが意気揚々と、きらきら輝く太陽に熱せられた煉瓦敷きの道を歩き出す。その後ろをハティが慌てて追いかけた。

「それって、どういう意味？」

思わず駆け寄り隣に並べば、エルザは「さあな」と肩をすくめた。

「そんなに物を食ってはいけないと言われてるんだ。熱々のものとか、極端に冷たいものとか」

「……………」

何か持病が、とハティはすうっと青ざめた。そういう食事制限をして、体調管理をしているのだろうか。だとしたら、こんな今日のような買い食いは、下手をしたら命の危機に関わるのではないのだろうか。

「あの……エルザ……」

「ああ、病気とかそういうのではないから安心せい」

(いや、本人に言われてもちっとも安心ないんですけど……)

「私も隠れて夜中に蜂蜜とか舐めてるから」

(いやいやいやいや、そんなつまみ食いのものと今回のでは大分違うのでは……)

意気揚々とレストランのガラス戸を開けるエルザに続きながら、ハティはこの辺りに病院はあるのだろうか、と半ば本気で周囲に視線をやるのだった。

「で？お前は今どこに居るんだ？」

何度目かになるか分からない質問を、コーネリアにするも、彼女は「うふふ」と笑うだけで答えない。ち、と舌打ちをしてシャーロックは皿の上の魚のソテーをフォークで突き刺した。

「何も教える気が無いのなら俺は帰るぞ。忙しいんだ」

吐き捨てて、じろりと睨みあげれば「こあーい」とコーネリアが肩をすくめた。

その様子に苛立ちしか覚えない。

こめかみを引きつらせて、シャーロックは勢いよく魚を頬張ると、氷の浮いたグラスの水を飲みほして、席を立とうとした。その腕を、コーネリアが掴む。

ぐ、と見かけによらない強い力で抑えられて、シャーロックが眉間に皺を寄せた。

「なんだ」

「善意が無くては出来ない事」

「？」

謎かけのように、唐突に言われた台詞に、シャーロックが更に渋い顔をする。その彼の碧眼を覗き込み、緩やかに手を離れたコーネリアが、深く椅子の背もたれに背を預けた。

「最近のアンバーの使われ方を、貴方、知ってるでしょう？」

「……………それなりに」

腕を組んで視線を、コーネリアから逸らす。同じく、コーネリアもシャーロックと視線を合わせない。お互いが反対の方向を向いたまま、女が淡々と切り出した。

「禁忌……タブーに抵触すると知っていても、やって欲しいと願うのが、残された者。いくら規制をかけても、取り締まりを強化しても、『善意有る行為』だからと取りやめる事が無い」

「……………」

「気持ちは判るわよ」

ふーっと溜息を付いて、コーネリアは頬杖を突いたまま、ガラス窓の向こうに広がる青空に目を細めた。

「精霊王の元に還るべき存在を、現にとどめておきたいって言うのはね」

それが、心から愛している存在なら、もっと。

かるん、とグラスに氷の当たる音がして、コーネリアは視線を相対する青年に向けた。彼はグラスに残っていた冷水を飲み干すと、ことん、とそれをテーブルに置く。

「死んじまった人間に固執するのは、生きてる人間だけだ」

死んじまった人間は、生きてる人間に固執したりしない。

「———言い切るわね」

呆れたように口を開くコーネリアに、シャーロックは鼻を鳴らした。

「固執してるんなら、生き返るだろうさ」

「……………」

「何をおいても、どうしたくても、己の原型をとどめていなくても生き返りたいと願うだろう。そして、そうやって生き返らせ、生きている人間にも死んでしまった存在にも喜びを与える事が『善意』となるのなら、精霊も力を貸す。法術師も『蘇生』なんて力を使えるようになる。……だが、現段階で、それは出来ていない。更に、そんな行為は禁忌とされている」

ってことは、んなこと誰も望んでいないってことになるだろ。

トンデモナイ理屈を振りかざし、言い切ったシャーロックをコーネリアは半ばあきれたように眺め、それからふっとその赤く妖艶な唇をほころばせた。

「そうかもね」

「けど……そのせいでもっと厄介な『善意』がはびこってんだろ」

「……………そうなのよねえ」

溜息を付いて、コーネリアは己の掌を見詰めた。そこに、何かがあるように、じっと真白いそこを眺める。

「アンバーの安価供給による、弊害、てね」

ふふ、と苦笑し「気持ちは判るのよ」とコーネリアは再びその視線をシャーロックに向けた。「さっきの強盗事件。盗られた物は何も無い、って被害者の方が言ってるって言ったでしょう？」

ふっとそのオレンジの瞳を陰らせて、コーネリアは頬杖を突いたまま苦々しく笑う。

「先月、次女を病で亡くしてしまったそうよ」

「……………」

死んだ人間を生き返らせることは出来ない。
最大の禁忌で、精霊王もそれを許してはいない。

だが、たった一つ、死者と生者を繋ぐ方法がある。
アンバーを使った、「記憶保管」だ。

「記憶保管」

それは、アンバーに死者の脳が保有する記憶を移し代える事をいう。

ただしそれは、普通の写真などとは違い、一つの存在を、存在たらしめる「記憶」をそっくりそのまま移し代えてしまうので、アンバーの中に、その者の魂を捕えているのと同義になってしまうのだ。

アンバーに有る記憶は、決して上書きされる事はない。ないが、一つの存在が「何を思ってどう生きてきたか」が全て詰まってしまっている為、それを他人が覗き見る行為は死者冒瀆に値し、禁忌に抵触する、というのが現在の常識だ。

だが、先ほどの死者蘇生のように「精霊を含め全ての存在が禁忌としている」訳ではないため、やって出来ない事はない、と言うのがネックになっている。

要するに、問答無用で「出来ない」のではなく、「出来てしまうけどやってはいけない」という曖昧なルールで縛られた行為なのだ。

記憶保管に関わる精霊は、高位に値する「光」を司る存在だ。

高位と言うだけあって、対価は非常に珍しいものばかりが多いが、彼らと契約が出来ないわけではないし、記憶保管以外に、使える力も多々ある。

そんな光の精霊と契約をしている者は、光の精霊自体が高位存在だから、自然と法術師としてのレベルも高くなる。人から尊敬され、頼られる存在で有る事が多いだろう。

そんな彼らだからこそ、「常識的」に、記憶保管の術を使用することはない。

ないが。

弱い者には優しくあれ、というのが美德だと思いがちだ。

哀しむ者を癒したい。その悲しみを和らげてやりたい。その力があるのなら、それで幸せになるのなら……。

善意有る行為。

禁忌に抵触すると知りながら、アンバーに記憶を保管する人間が後を絶たないのは、そういった複雑な感情が絡み合った結果でもあるのだ。

取り締まる側としては頭の痛い話だろう。

「閉じ込めた記憶を解放できるのは、記憶を閉じ込めた法術師のみ、って言うのがせめてもの救いだけど……個人的な感想を言えば、私は絶対にそんな真似して欲しくないわ」

私の全人生が全部詰まってるなんて。そして何かの拍子に他人に覗き見されるなんて。

おー、嫌だ、と身体を抱くコーネリアに、「心配するな。絶対にないから」とシャーロックがどきっぱりと断言した。

「……………あんたね」

「お前みたいな厄介な存在、闇に消えた方がまだ世の為人の為だ。率先してお前の記憶を消そうと考える人間はいるだろうが、保管しときたいなんて奇特な輩は百二十パーセント存在しないから安心しろ」

「……………あんたに対して私が何を思ってるのかだけは、保管しておいて欲しいわ」

「そうか。では、今すぐ殺してやろう」

「返り討ちにして、あんたの中身をのぞくのも悪くないわよね」

「……………」

「……………」

無言のまま見合い、お互いにうふふあはは、と意味の判らない笑みを浮かべだした頃、「あ」という第三者の声がし、二人は顔を上げた。

「シャーロック…………」

「あ？……………なんだ、お前か」

二人の座る隣のテーブルに現れたのは、彼の連れであるハティと一人の少女だった。

まさか、こんな所に来てまで女性を引き寄せるとは。

隣のテーブルに案内され、席に着いたハティは、げんなりした表情でシャーロックを見遣った。

今度の連れはどんな女だ。

(随分とまあ……豊満な美女ですこと……)

メニューを見るふりをして、ちらちらと観察し、ハティはふんわりと童顔な印象の彼女に対して、「実際は気の強そうな女性だな」と心の内で感想を抱く。

シャーロックは見ての通りのどうしようもない俺様人間なので、こう言った強気な女性はあまり好みじゃない筈だと、ハティは勝手に分析していた。

どちらかと言うと、畏まって付いてくるような女が好みの筈だ。

(いや……そうでもないのかな……)

本性はどうであれ、彼はモテる。と言う事は、それなりに女性の前では取り繕っている場合が多いのだ。

騙されて涙する女を一人一人思い出しながら、ハティはますますもって、嫌そうに二人を見た。

こういうタイプの女は結構面倒だ。

可愛らしい外見を武器に、男に取り入るタイプと見た。そして、どちらかという主導権を握りたい方だろう。

男に貢がせて周りに侍らせるのが好きそうだし。

その豊満な身体で相手を虜にして、色々こう、吸い尽くしていくと言うか何と言うか。

「この二人はお前の知り合いか？」

面倒な事にならなければ良い、と色々な可能性とパターンを考え込んでいたハティは、正面の席に腰をおろし、興味津々といった風情でシャーロックと連れの女性を見ていたエルザの一言に顔を上げた。

「え？」

「コイツは俺の部下だ」

「……………」

顎でしゃくるようにしてシャーロックから示され、ハティはかちんと来る。

いつから部下になったって言うんだ、この野郎。

きっと睨みつければ、背もたれにだるそうに身体を預け、グラスを取り上げたシャーロックがにやっと笑ってハティを見た。

「で、こっちは俺の」

「愛人五号で～す」

「……………」

「……………」

「なんと！五号さんか」

ハティの冷たい視線がシャーロックに注がれ、シャーロックの冷たい視線が女性に注がれ、女性の妙に嬉しそうな視線がエルザに注がれ、エルザがきらきらした視線をハティに贈った。

感嘆の声を上げている。

「いや……愛人じゃねえし」

「違うの!？」

げんなりして答えるシャーロック。対して、ハティと女性の台詞が被り、ぴき、と彼の額に青筋が浮かんだ。

「ま、あんたに愛人が三人も四人も居てもおかしくないから、どうでもいいと言えばどうでも良いんですけど」

ぱたん、とメニューを閉じて、ウエイトレスを呼びながら、ハティは遠い眼差しで告げた。

「あんたの女性問題に、あたしは付き合ってもらえないから」

きっぱりと断言するハティに、女性がちょっとだけ目を丸くした。

「貴方、シャーロックの相棒なんでしょう？」

「……………ええまあ、不本意ながら」

興味を引かれたのか、女性が身を乗り出した。彼女のオレンジ色の瞳が、興味深そうにきらりと光る。

「一緒に旅をしてる？」

「……………ええまあ、不本意、ながら」

「もしかして、喰われちゃった？」

その瞬間、飲んでいたグラスの水が変な所に入り、ハティは盛大に咽た。陸に居ながら水死しそうなほど咽る彼女に、女性は気の毒そうに目を細めた。

「あら……違うの？私ったらてっきりライバルさんかと思ったわ～」

のほほん、と笑う女を睨みつけて、ハティは肩で息をしながら「こんな男、死んでもごめんだわ」ときっぱりと言い切った。

言い切れる自分が嬉しい。

「どうして？」

「お前に言われる前に、俺の方が願い下げだ」

女性の台詞を遮って、シャーロックが鼻で笑って告げる。ばちばちと火花が散りそうな視線の応酬。それを外から眺めていたエルザが「複雑な人間関係だな」とさも神妙そうに告げた。

「とにかく！私はしづしづ、頼まれて、仕方なく、コイツと一緒に居るだけですから」

エルザと女性に宣言するようにハティは告げて、やってきたサーモンマリネにフォークを付き立てた。

ナイフで切り刻む様にするハティの仕草を眺めて、「そう言えばお前」と自ら注文したステーキを前に、エルザは綺麗な瞳をくるんとさせた。

「人を探しているとか言っていたが、それは一体何者なのか、聞いても構わんか？」

「……………」

「……………」

「？」

ごくんと咀嚼していたマリネを呑みこむハティと、グラスの水を煽るシャーロックの視線がぶつかった。

微妙な沈黙に、「まずかったのなら、答えなくてよい」とエルザが上目遣いに二人を見る。

不意に、店内のざわめきがダイレクトに四人を包み込む。外の喧騒が静寂を浮かび上がらせる

。

「……別に訊いちゃ悪い事じゃねえさ」

かるん、とグラスの氷を鳴らし、シャーロックが肩をすくめた。

「俺とコイツが探してんのは、俺の大事なものを壊した奴だ」

「大事なもの？」

大事な大事な、婚約者。

フォークを置いて、ハティはきゅっと唇を噛んだ。

ジュリエッタは綺麗だった。

本当に本当に綺麗で、ハティは憧れと尊敬を抱き、大好きだった。

目の前の男がそうなのかどうなのかは判別に困るが、彼女が「眠らされて」から、シャーロックが旅に出るまで決断は早かった。

この男と旅をするようになって、面倒な事は絶対にやりたがらない、冷めた性格の男だと知った今、ロッセロッド相手に抱く感情の大きさと深さに、ハティは驚いてもいたのだ。

そして、それ程までに、ジュリエッタの事が大事なのだと言う事も。

「そうだよ。……暇つぶしとかほざいて、余計な事をしてくれた奴だ」

殺してやりたいくらいだ。

ふん、と鼻を鳴らして告げるシャーロックに、ハティはそっと視線をやる。彼は苦々しげな眼差しで窓の向こう、夏の日差しに輝く世界を見詰めていた。

「大事なものが壊れるのは、辛いことだな」

そんなシャーロックに、エルザがぽつりと零す。自分の目の前に有るステーキにフォークを突き立てて、微かに笑う。

「壊れて、無くなって……跡形も無く消えるのは辛い事じゃ」

うんうん、と頷くエルザの口調が、どこか寂しそうで、ハティは彼女がたった一人、ディアナと一緒にあの巨大な屋敷に居た事を思い出す。

彼女もまた、大事なものが壊れて無くなった経験を持っているのだ。

落ちた沈黙。

その中で、色々考え込んでいたハティは「はいはい、やめやめやめやめ」という愛人五号さんの声に我に返った。

「辛気臭いわね……ここは葬式会場？思い出を語り合う場所？違うでしょ」

まったく嫌になるわ。

肩をすくめ、女性が立ちあがる。

「私はまだこれから仕事があるしい……お先に失礼するわね」

ぼん、とシャーロックの肩をたたき女を、男は心底嫌そうな眼差しで見上げた。

「お前が勝手に俺を連れ出したんだろうが」

「そうだっけ？」

くすっと笑い、彼女は身を屈めるとその頬にちゅっとキスをする。

おおおおお、とエルザが感嘆の声を上げ、ハティがぎょっとしたように目を見張る。再び手にしていたフォークからサーモンマリネが零れ落ちている。

「……とにかく、アンバーの件、話したからね？」

「……………」

何が言いたい、と射殺するような目で睨みつけると、妖艶に笑った彼女がその唇を耳元に寄せる。

「あなたの探し人と少なからず関係があると、思うんだけどねえ」

今回の件。

舌先が耳朶を掠め、ぞわりとシャーロックの背に鳥肌が立つ。

殴ろう。

コンマ数秒で決定付けて手を振りあげるシャーロックを、あっさりかわして、女は「じゃあねえ」と身一つで去って行く。

伝票は思いっきりテーブルに残されたままだ。

「あんの野郎」

立ち上がり、後を追いかけてやろうとするシャーロックは、更に赤面するような場面に遭遇し、固まっていたハティの首根っこを掴みあげた。

「え！？」

「行くぞ！あの野郎に先を越されてたまるか！」

「ええ！？ちょ……ええええ！？」

もたもたすんな！とっとと行くぞ！

引きずるように椅子から降ろされる。そのまま引きずられるハティの手を、エルザがとった。

「先に帰るのなら、これをやる」

「え？」

ぎゅっと手の中に押し込まれたのは、小さな包み。鶯色の瞳をくるんとさせて、エルザは秘密を打ち明けるように、くすっと笑って見せた。

「付き合ってくれたお礼だ」

「で、でも」

「とっとと行くぞ！」

「あ、アンタね！エルザを置いて行けるわけ」

「行っていいぞ。あんな女にシャーロックとやらを取られたらお前が可哀そうだしな」

「はあ!？」

何盛大な勘違いをしているんだ、この子はっ!

引きずられ、もつれる足で店を出るハティにエルザはひらひらと手を振った。

「わらわなら大丈夫じゃ。一人で帰れる」

「ちょ……」

「楽しかったぞ〜」

にっこり笑うエルザに見送られ、会計を済ませたシャーロックにカ一杯手首を引かれて、ハティは蒸し暑い、ぎらぎらした太陽の輝く往来へと再び送り出されるのだった。